
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF TOHOKU UNIVERSITY OF ART AND DESIGN

第27号 2020年3月

知覚的クオリアと美的クオリアに関する意識の高階表象理論にもとづく考察

An Inquiry into Perceptual Qualia and Aesthetic Qualia Based on the Higher-Order
Representational Theory of Consciousness

松崎 俊之 | MATSUZAKI Toshiyuki

知覚的クオリアと美的クオリアに関する意識の高階表象理論にもとづく考察

An Inquiry into Perceptual Qualia and Aesthetic Qualia Based on the Higher-Order Representational Theory of Consciousness

松崎 俊之 | MATSUZAKI Toshiyuki

The purpose of this paper is to consider the perceptual qualia and aesthetic qualia based on the higher-order representational theory of consciousness, as its title shows, and here the primary focus is put on the elucidation of their occurrence mechanisms and thereby of the relation of both qualia. The higher-order representational theory of consciousness in general is mainly classified into the higher-order perception theory and the higher-order thought theory. While the former regards the higher-order representations, which make mental states conscious ones, as perceptual states of some kind, the latter regards them as conceptual thoughts, i.e., cognitive states containing some kind of conceptual components. Firstly, in this paper, I will critically reconstruct the fundamental theoretical structures of these theories, and then make clear the logical structure of introspection and deal with the “problem of self-consciousness” in relation to the higher-order representational theory in general. Secondly, based on the results acquired through such a task, I will elucidate the occurrence mechanisms of perceptual qualia and aesthetic qualia, and consider the relation between them. And finally, I will present the occurrence conditions and the non-occurrence conditions for aesthetic qualia.

Keywords:

知覚的クオリア、美的クオリア、意識の高階表象理論、美的高階知覚

perceptual qualia, aesthetic qualia, higher-order representational theory of consciousness, aesthetic higher-order perception

1. 序論

本稿の課題はそのタイトルが示すように意識の高階表象理論 (higher-order representational theories of consciousness) に依拠して知覚的クオリアと美的クオリアについて考察することにあるが、ここではとりわけ意識の高階表象理論の枠組みのもとで両クオリアの成立機序を説明するとともに、それをとおして両クオリアの関係を明示することに焦点が置かれる。

上記の課題を遂行するために本稿では議論を展開するにあたっていくつかの作業前提を設定することにするが、それらを列挙するならば以下になる。

(1) すべてのクオリア¹は意識的である²。

「すべてのクオリアは意識的である」、裏を返せば「無意識的なクオリアは存在しない」ということはわれわれの直観に照らすならば自明の理であると言える。このことは、あるクオリアをもつとはそのクオリアを意識することに他ならず、仮にクオリアが無意識的なものであったとするならば、そうした無意識的なクオリアをもったところで結局のところそれを意識することはないのであるから、それはクオリアをもたないことと同じになってしまうことから明らかである。クオリアに関してわれわれが抱くこの直観的理解にあえて異を唱えんとするならば³、それはしかるべき必然性と妥当性を具えた何らかの理論構制のもとになされなければならないであろう。

しかしながら、すべてのクオリアが意識的であることはわれわれの直観に頼らずとも別の角度から確証可能である。すなわち、ヴァン・ゲーリックが指摘するように、意識的な心的状態に関するひとつの理解によれば、クオリアをもつことが取りも直さずその心的状態が意識的であることの徴表と

なる(van Gulick [2014]: 9)⁴。仮にそうだとするならば、クオリアはそれ自体が意識的であるということになる。なぜならば、クオリアが意識的でない、すなわち無意識的であるとするならば、そうした無意識的なクオリアをもったところで、その心的状態が意識的なものになることはないと考えられるからである⁵。

(2) 知覚的クオリアと美的クオリアに関する暫定的理解と各クオリアの範例の呈示

本稿ではその議論を開始するにあたってのひとつの作業前提として、知覚的クオリアと美的クオリアに関して暫定的理解を呈示し、前者を知覚経験一般において問題となるクオリアとして、また後者をとくに美的経験において問題となるクオリアとして捉えることにする。

ここで注意を要するのは、とくに美的クオリアに関して、「美的経験において問題となるクオリアが美的クオリアである」という理解のもとに美的クオリアについて定義的説明を試みるとき、仮に美的経験に関して美的クオリアから独立した定義的理解が示されないとするならば、「美的クオリアとは美的経験において問題となるクオリアであり、一方美的経験とは美的クオリアが問題となる経験である」という論理的循環を犯す恐れが生ずるという点である。この問題は、あくまで美的クオリアに関する上記の理解が導入のために設定された暫定的理解であることに起因するものと言え、本稿第4章第2節では、意識の高階表象理論に依拠して美的クオリアの成立機序を解明してゆくなかで、上記のような論理的循環の疑いは完全に払拭されることになる。

なお本稿においては、色彩のクオリア、より具体的には、赤のクオリアを知覚的クオリアの範例と位置づけ、また、対象のもつ「赤さ」と関連づけられる「あざやかさ」のクオリアを美的クオリアの範例と位置づけることで、議論を展開することにする⁶。

(3) 意識の高階表象理論の基本的主張

いかなる種類の理論であろうとそれが意識に関する理論であるかぎりにおいて、「ある心的状態を意識的な心的状態とするのは何か」という問いは、意識の理論にとってきわめて重要な中核的な問いをなすのであるが(Gennaro [2017]: 88)、意識の高階表象理論は一般に、この問いに対して「ある心的状態を意識的なものとするのはある種の高階表象である」と答える。このことから明らかなように、意識の高階表象理論の基本的主張は「ある心的状態はそれをターゲットとするある種の高階表象をとまなうことに

よって意識的な心的状態となる」といったものであると言える。

以上本稿における三つの作業前提について論じてきたのであるが、つぎにこれらの作業前提とも密接に関係する、本稿全体にわたってその論理的基盤をなす基本的論証過程を呈示しておくことにしよう。

本稿の基本的論証過程の大枠は以下に挙げる三段論法(syllogism)によって示される。

【大前提】ある心的状態がそれをターゲットとする高階表象をとまなうとするならば、その場合にかぎって(iff)、その心的状態は意識的な心的状態である。

【小前提】すべてのクオリアは意識的な心的状態である。

【結論】すべてのクオリアはそれをターゲットとする高階表象をとまなう。

この三段論法に関して若干の説明を付すならば以下のようなようになる。

まずその**【大前提】**に関してであるが、この命題は上に挙げた作業前提(3)「意識の高階表象理論の基本的主張」をより明確なかたちで示したものと言える。この大前提をなす仮言命題の前件と後件が「～とするならば、その場合にかぎって(iff)」という接続句で結合されていることから明らかなように、これは「ある心的状態がそれをターゲットとする高階表象をとまなうとするならば、その心的状態は意識的な心的状態であり、かつ、ある心的状態が意識的な心的状態であるとするならば、その心的状態はそれをターゲットとする高階表象をとまなう」という連言命題と等値であると見なされる。それゆえ、この大前提から縮小律をとおして「ある心的状態が意識的な心的状態であるとするならば、その心的状態はそれをターゲットとする高階表象をとまなう」という仮言命題が導出されることになる。したがって、上に示した大前提に代えて、この「ある心的状態が意識的な心的状態であるとするならば、その心的状態はそれをターゲットとする高階表象をとまなう」という仮言命題を大前提として定立することも可能となるが、見様によっては、このあらたな大前提によるほうが全体の論証過程がより見通しのよい明確なものになると言えるかもしれない。

ついでその**【小前提】**について述べるならば、この「すべてのクオリアは意識的な心的状態である」という命題は「すべてのクオリアは意識的である」と「すべてのクオリアは心的状態である」という二つの命題から合成されたものであると言える。このうち前者の「クオリアは意識的である」とい

う命題は上に挙げた作業前提(1)と同一の命題である。

一方後者の「クオリアは心的状態である」という命題については、「クオリアをもっている状態」もしくは「クオリアを感じている／感じている状態」が心的状態なのであって、クオリア自体は心的状態ではないのではないかとの疑義が呈されるかもしれない。こうした疑義を解消するにあたっては、「クオリアをもつ／感受する／感じる」という表現をあらためて取り上げ、それらを分析的に考察することがまずは肝要となる。「クオリアをもつ」、「クオリアを感受する」、「クオリアを感じる」というこれら三種の表現はいずれも同一の事態を指し示しているものと考えられることから、そのいずれをもとに考察をおこなおうとその論旨に本質的な違いは生じない。そこで以下では、これら三種の表現のうち、直観的な理解を可能とするという点で他の二つの表現に勝るものと見なされる「クオリアを感じる」というもっとも自然な日常的表現を取り上げ、それをもとに考察をおこなうことにする。

まずは考察にあたっての端緒として「クオリアを感じるの誰か」という問いを取り上げることにしよう。いま仮に「クオリアを感じるの誰か」と問われたならば、当然ながら、「それはクオリアを感じているその当人である」と答えることから明らかなように、「クオリアを感じる」のはあくまでその経験主体であるということになる。だとすれば、「クオリアを感じる」という表現をその作用主体も明示するかたちで補完するとするならば、「クオリアをその経験主体が感じる」といった表現が得られることになる。

一方で、クオリアとは要するに「その経験主体の感じるクオリア」に他ならないと見なされる。いま試みに「クオリアをその経験主体が感じる」という表現における「クオリア」に「その経験主体の感じるクオリア」を代入してみるならば、「その経験主体の感じるクオリアをその経験主体が感じる」という表現が得られることになるが、これは紛れもなく一種の冗語表現であると言える。このような冗語表現が出来するにいたったその淵源を探るならば、それは「クオリアを感じる」という表現自体のうちに求められるものと考えられる。この点から推断するに、事態を正しく言い表す表現は「クオリアを感じる」ではなく、「何かを感じる」という表現であると論定できる。仮にそうだとするならば、「クオリアを感じている状態」とは正しくは「何かを感じている状態」であるということになるが、あらためて言うまでもなく、「何かを感じている状態」こそまさにクオリアに他ならない。

以上の議論にもとづくならば、上に挙げた疑義に示された

「クオリアを感じている状態が心的状態である」という理解とは要するに、「クオリアは心的状態である」という理解に他ならないということになり、ここに先に挙げた疑義は解消されることになる。

以上本稿の基本的論証過程の大枠を示す三段論法について若干の補足的説明をおこなってきたのであるが、そこでの議論を踏まえることでこの三段論法に改訂を施し、それをより精確な論証過程としてあらためて呈示するならば以下ようになる。

①ある心的状態がそれをターゲットとする高階表象をとまなうとするならば、その場合にかぎって (iff)、その心的状態は意識的な心的状態である (作業前提(3))。

①を同値変形することで

②ある心的状態がそれをターゲットとする高階表象をとまなうとするならば、その心的状態は意識的な心的状態であり、かつ、ある心的状態が意識的な心的状態であるとするならば、その心的状態はそれをターゲットとする高階表象をとまなう。

②から縮小律をとおして

③ある心的状態が意識的な心的状態であるとするならば、その心的状態はそれをターゲットとする高階表象をとまなう。

④すべてのクオリアは意識的である (作業前提(1))。

⑤すべてのクオリアは心的状態である。

④と⑤から合成律をとおして

⑥すべてのクオリアは意識的な心的状態である。

③と⑥から

⑦すべてのクオリアはそれをターゲットとする高階表象をとまなう。

序論を締めくくるにあたり最後にあえて一言贅言を弄せば、上に掲げた論証にしたがうならば、知覚的クオリアと美的クオリアもまたそれがクオリアであるかぎりにおいて、それをターゲットとする高階表象をとまなうことになる。

2. 無意識的なクオリアは可能か

序論に述べたように、われわれは「すべてのクオリアは意識的である」という理解を本稿全体にわたる作業前提として位置づけるのであるが、クオリアに関するこうした理解に対して異議を唱える論者にライカン(Lycan [1996])がいる。そこで本章ではライカンの議論を批判的に検討することをおとし、「すべてのクオリアは意識的である」というわれわれの理解をあらためて確証することにしたい。

ライカンはLycan [1996]において、クオリアと意識との関係について以下のように述べる。

主体の〔心的〕状態がクオリアをとまなうとするならば、その主体はそうした状態にあること、あるいはそのクオリアを実感していること(being acquainted with)を意識している(conscious)、もしくは覚知している(aware)⁷に違いないと単純に想定することはできない。(Lycan [1996]: 8-9)

すなわちライカンは、クオリアと意識との間に必然的な関係を認めることはできないと考えるのである。クオリアと意識との関係についてのライカンのこうした理解は、クオリアを感受しているからといって、必ずしもそのことによってその心的状態が意識的なものとなるわけではない、すなわち無意識的な状態でのクオリア感受がありうる、端的に言うならば、無意識的なクオリアが存在するということを含意することになる。

この点を具体的に説明するために、ライカンはアームストロングの挙げる「長距離トラック運転手」の例(Armstrong [1968]: 93-5, Armstrong [1997]: 723-4)を援用して、以下のように述べる。

アームストロング(1980)[=Armstrong [1997]]はよく知られた長距離トラック運転手の例を挙げている。彼は運転の最中まったく別のことを考えており、心ここにあらずの状態(いわば)自動操縦で車を運転している。我に返るやいなやこの運転手は自分のしていることに気づかぬまま何マイルもの距離を運転していたことを知る。しかし彼は道路の曲がり具合や交通標識や停止信号などを知覚していたに違いない。彼が実際に赤信号で停止

したとするならば、信号は恐らく彼には緑ではなく赤に見えたのであろう。これがまさに彼が停止した唯一の理由なのである。したがって、語の厳密な意味で、彼には赤のクオリアが提示されたのである。つまり、彼の視野の一面は赤を現象的もしくは質的性格(phenomenal or qualitative character)を具えたものとして受け取ったのである。しかしこの運転手はそうした事柄に何ひとつとして気づかなかった。彼の知覚はまったく内観されることのない無意識的もしくは潜在意識的な知覚(un- or subconscious perceiving)⁸だったのである。(Lycan [1996]: 76)

すなわちライカンの理解では、件の長距離トラック運転手は、自分の運転操作をまったく意識していなかったにもかかわらず、現に赤信号で停止したのであるから、彼は無意識裡に赤のクオリアを感受していたものと解されることになる。こうした事態を一般化して捉えるならば、クオリアの感受は無意識裡におこなわれることもありうる、あるいは別言するならば、無意識的なクオリア(感受)が存在しうるということになる。

しかしながら長距離トラック運転手の事例に関して、ライカンのこうした理解が唯一可能なものと言えるのだろうか。この問いに対しては確信をもって「否」と答えることができない。なぜならば、ライカンの理解とは別に、以下の二つの理解が可能であると考えられるからである。

- (1)長距離トラックドライバーは赤のクオリアを感受することなく信号が赤であることを知覚(認知)した。
- (2)長距離トラックドライバーはたしかに赤のクオリアを意識的に感受したのであるが、そのことを記憶していなかった。

以下これら二つの理解について順に見ておくことにしよう。

まず第一の理解について述べるならば、これは一種の盲視状態(state of blindsight)⁹であると見なされる(盲視状態にあっても色を推測することは可能である¹⁰)。しかしながら盲視現象は、第一次視覚野に損傷を受けたために、たまたま有線領外経路¹¹の微弱な働きが活性化されたものに過ぎず、視覚野が損傷されていない晴眼者では有線領外経路は(「復帰抑制(inhibition of return=IOR)」¹²等、一部の潜在的な機能を除けば)ほとんど意味のある役割を果たしていないものと見なされるため(本田 [1998]: 29-30)、長距離トラックドライバーの場合はそもそもこうした盲

視状態は問題となりえないと考えられる。

つぎに第二の理解についてであるが、これに関連してブロックはBlock [1995]において、日産の資金提供のもとにMITがおこなった研究を踏まえ、以下のように述べている。

明らかにこの〔長距離トラック運転手の事例に見られる〕現象に関連する調査を含むMITでの研究に日産は資金提供をおこなっているのであるが、その簡単な予備的成果について私が聞いた話では、「無意識的な」運転手をテストしたところ、30から45秒前までは彼らはつねに道路や〔運転操作の〕決定、あるいは知覚等について（精確に）思い起こすことができるとのことである。この結果に驚く者は誰一人としてなからう。これ以外にどのようなことが予測できるというのか。あなたがいまから30秒前までの間のことについて質問される被験者であるとしたならば、その30秒前までの間何も経験しなかったと答えると思うだろうか。もしそう答えるとするならば、あなたは理論の統制下 (in the grip of a theory) にあることになる。このこと〔長距離トラック運転手の経験〕は、それが記憶の窓が移ろいゆくことですぐさま忘れ去られてしまうという点を除けば、他の経験と同様、真正な経験の明白な事例であるように見える。運転手は何らかの注意を道路に向けている。そうでなければ車は衝突することであろう。まれにそういう人もいるが、彼〔運転手〕が自己の〔心的〕状態に注意を払うことはない。もちろん、道路や経験それ自体により多くの注意を向けるならば、異なった経験がもたらされることであろう。しかし運転手が不注意であったとしても、それでもなお彼は道路の曲がり具合や赤信号、あるいは彼の周りを走行する他の車を経験している。その運転手であるとはどのようなことか (it is like to be that driver) といったものは何もない、あるいは説明ギャップ (explanatory gap) が存在する以上、その運転手であるとはどのようなことかはここでは適用できないなどと、どうして想定しなければならないというのか。(Block [1995]: 280. なお〔 〕内は松崎による補記。以下の引用においても同様)

この一節からも明らかなように、ブロックはMITの研究成果を踏まえ、長距離トラック運転手の事例に関して、運転手は間違いなく (赤信号に起因する) 赤のクオリアを意識していた、別言するならば、彼の赤のクオリア経験はあくまで意

識的な経験であったのだが、そのことをすぐさま忘れ去ってしまい記憶にとどめていなかったに過ぎないと解釈する。

この点に関してさらに詳しく説明するならば、以下のようになる。

(1)MITの研究成果が示すように、運転手は、テストがおこなわれた t_2 の時点より30から45秒前までの間に位置する t_1 の時点で感受した赤のクオリアについては記憶しており、それによってその赤のクオリアが意識的なものであったことが確認される。

(2)それに対して運転手は、テストがおこなわれた t_2 の時点から見て30から45秒より前に位置する t_0 の時点で感受した赤のクオリアについては記憶していないが、仮にテストが t_0 の時点から見て30から45秒以内におこなわれたとするならば、 t_0 の時点で感受した赤のクオリアを運転手は記憶しており、それによってその赤のクオリアが意識的なものであることが確認されるものと推測される (以下時点を過去に遡っても同様のことが成り立つものと推測される)。

以上のことから明らかなように、ブロックの理解では、クオリアを感受している心的状態はあくまで意識的な心的状態であって、無意識的なクオリア (感受) は存在しないということになる。

しかしながらライカンは、こうしたブロックの理解に対して疑義を呈し、以下のように論ずる。

〔長距離トラック運転手の事例に関するブロックと私との間の見解の〕相違は、たんに用語上の問題に過ぎないのではないかと思われる。たとえ運転手がことさら経験に注意を払っているわけではないにせよ、経験は潜在意識的 (subconscious) なものではまったくなく、すなわち、恐らく運転手は、ぼんやりとはあるが、受動的に赤などの経験を覚知しているのだらうとブロックが考えていたのではないかと私は疑っている。／私はそうは考えないが、より重要な点は、日産の研究に関するブロックの議論がそのことを示すことに失敗していることである。運転手が半ば夢見心地の状態で検査されようと、それより30〔から45〕秒以内の道路の知覚を思い起こすことができることがたとえ事実だとしても、この事実によってその運転手がその時点で〔自分が〕知覚していたことをいささかなりとも覚知していたということが証明されるわけではない。つぎのように言ったとしても何ら不整合は生じない。すなわち t_1 の時点で運転手は赤を知覚したのだが、気が散って

いたため自分が赤を知覚していることをまったく覚知していなかった。しかし検査を受けたt2の時点では、知覚していたことの記憶—それは潜在意識的に保持されたものである—とはいえ、以前に知覚したことが残した痕跡である—にアクセスすることが可能となった、と。(Lycan [1996]: 178, note 9)

ライカンはここで、件の運転手は30から45秒前まで知覚について(精確に)想い起すことができるというMITの調査結果を受け入れたうえで、この調査結果に関してブロックとは異なる解釈を示し、MITの調査結果は必ずしも30から45秒前までの(赤のクオリア)知覚について運転手が覚知(意識)していたことを証するものではないとして、ブロックの理解を斥ける。ここであらためてライカンの解釈の要点を確認しておくならば、それは以下の3点にまとめられる。

- (1)30から45秒前までに位置するt1の時点で運転手は赤を知覚したのだが、自分が赤を知覚していることを覚知していなかった。
- (2)運転手が赤を知覚していたことの記憶は以前に赤を知覚したことの痕跡として潜在意識(的)に保存されていた。
- (3)運転手が検査を受けたt2の時点で、潜在意識(的)に保存されていた赤を知覚していたことの記憶にアクセスすることが可能となった。

上記の三点について、個々に批判的検討を加えるならば以下のようになる。

まず第一の点についてであるが、運転手が「赤を知覚していることを覚知(意識)することなく、赤を知覚する」とするならば、彼は赤のクオリアを感受することなく赤であることを知覚(認知)すると見なされ、そのかぎりにおいて、彼は一種の盲視状態にあると解されることになる。しかしながら、上段で長距離トラック運転手の事例をめぐる第一の理解に関して指摘したように、運転手が晴眼者である以上彼が一種の盲視状態にあるとは考えられない。

したがって残る可能性は「運転手は赤の知覚を潜在意識的に覚知していた」、すなわち「彼は赤のクオリアを潜在意識的に感受していた」ということになるが、ここでの要点はあらためて言うまでもなく、無意識的な心的状態と潜在意識的な心的状態との違いにある(ただしライカンは、註8において指摘したように、「無意識的」と「潜在意識的」とをほぼ同義の術語として捉えている)。というのも、もし両者が同一のものであるとするならば、赤のクオリアの潜在意

識的感受はその無意識的感受と実質的に同じものとなり、結局のところそれは一種の盲視状態を意味することになってしまうからである。

そのためここでは、潜在意識的な心的状態を以下のように解することで、無意識的な心的状態との相違を明確化することを試みることにする。すなわち潜在意識的(subconscious)な心的状態とは、無意識的(unconscious)な心的状態ではなく、あくまで意識的(conscious)な心的状態の一種としてそのもとに包摂されるものであるが、潜在意識的な心的状態は意識の中心に置かれるものではなく、あくまでその周辺に置かれるものであるという点で、狭義での意識的な心的状態から区別されるのである。たとえば視野の中心部ではなくその周辺部に位置する赤い対象を知覚することで赤のクオリアを感受するケースがこの潜在意識的な心的状態にあたる。

潜在意識的な心的状態をこのように解するならば、「運転手は赤のクオリアを潜在意識的に感受していた」とは、「運転手は意識の中心においてではなくその周辺において赤のクオリアを感受していた」ということを意味することになるため、その強度と明晰性の度合いこそ異にするとはいえず、要するにこれは「運転手は赤のクオリアを意識的に感受していた」ことに他ならないと論断されることになる。

つぎに第二の点についてであるが、「赤を知覚していたことの記憶は以前に赤を知覚したことの痕跡として潜在意識(的)に保存されていた」というライカンの主張を「赤のクオリアを潜在意識的に感受した記憶がその感受の痕跡として潜在意識(的)に保存されていた」という主張として捉え返すとき、第一に問題となるのは、赤のクオリアの意識的感受ならいざしらず、赤のクオリアの潜在意識的感受(あるいはライカンの理解に倣って「潜在意識的」を「無意識的」とほぼ同義の術語として捉えるならば、赤のクオリアの無意識的感受)がそもそも記憶されうるのかという点である(cf. Armstorong [1997]: 727-8)。仮にそれが記憶可能だとして、赤のクオリアを潜在意識的に感受した記憶を潜在意識(的)に保存するとは具体的にいかなる事態を指すのか、またそれはいかなる心的メカニズムによって可能となるのかが不明である以上(少なくともこの点に関してライカンは何ら言及もおこなっていない)、ライカンのこうした主張を額面どおり受け入れることはできない。

最後に第三の点についてであるが、ライカンは「運転手が検査を受けたt2の時点で、潜在意識(的)に保存されて

いた赤を知覚していたことの記憶にアクセスすることが可能となった」と主張する。そもそも潜在意識(的)に保存されていた、赤のクオリアを潜在意識的に感受した記憶に事後的にアクセスすることはたして可能なのかがいまひとつ判然としないものの、仮にそれが可能であるとして、それがいかなる心的メカニズムによって可能となるがまったく明らかとされていない以上、ライカンのこうした主張もまたそれを額面どおり受け入れることはできない。

以上MITの調査結果に関するライカンの解釈を構成する三つの要点に関して批判的に検討をおこなってきたのであるが、そこでの議論を踏まえ、MITの調査結果に関するライカンの解釈について総合的な観点から論評を下すならば以下ようになる。

仮に百歩譲ってライカンの解釈の要点(2)と(3)を受け入れ、赤のクオリアを潜在意識的(≒無意識的)に感受したことが潜在意識(的)に記憶され、検査を受けた時点で運転手がその記憶にアクセスしたことを認めたとしても、要点(1)について論じたように、「クオリアを潜在意識的に感受する」とは要するに「赤のクオリアを意識的に感受する」ことに他ならないことから、結局のところライカンの解釈は「赤のクオリアを意識的に感受したことが潜在意識(的)に記憶され、検査を受けた時点で運転手がその記憶にアクセスした」ということと本質的に変わらないことになる(記憶は通常意識的ではなく潜在意識的におこなわれることから、「潜在意識的に記憶される」という点に特段の意味は認められない)。

こうしてMITの調査結果に関するライカンの解釈は斥けられ、その結果、長距離トラック運転手の事例に関しては「(30から45秒前までに位置する時点において赤のクオリアを意識的に感受したことを運転手は記憶にとどめていたがそれ以前に関しては、彼は間違いなく(赤信号に起因する)赤のクオリアを意識的に感受したにもかかわらず、そのことを記憶にとどめていなかった」というブロックの解釈が妥当であると結論づけられることになる。

長距離トラック運転手の事例に関してブロックの解釈が妥当なものであるとするならば、ライカンの思惑とは裏腹に、この事例が無意識的なクオリア感受がありうること(端的に言うならば、無意識的なクオリアが存在すること)の証左にはならないと論断されることになり、ここに本稿における作業前提をなす「すべてのクオリアは意識的である」というクオリアに関するわれわれの基本的理解があらためて確認

されることになる。

以上われわれは、最終的には「無意識的なクオリアが存在する」という主張にいたるライカンの議論を批判的に検討することで、ライカンの主張を斥け、「すべてのクオリアは意識的である」というクオリアに関するわれわれの基本的理解をあらためて確認したのであるが、以下に挙げるライカンからの一節(一種の注記として括弧内に示されている)は、彼の上記の主張とは独立に、われわれの立場から見ても注目に値する重要な論点を含むものと見なされることから、本章の最後にこのライカンの一節を取り上げ、それについて検討を加えておくことにしたい。

その一節とは以下のものである。

[感覚(sensation)を十全な仕方で経験するには、関連するクオリアをもつとともにそのクオリアに内観的に(introspectively)気づく必要があるという]今挙げた点を見逃すことから生ずる覚知に関する内的感覚理論(the innersense theory of awareness)に対する直観的で(instinctive)強力な批判が存在する。潜在的なものであるにせよ、この批判の主たる前提は、まったく質的でない心的状態に対してたんに高階のモニタリング(higher-order monitoring)が加えられただけでは恐らくクオリアを生み出すことはできないだろうというものである。そしてこの前提は明らかに正しい。しかし内的感覚理論家は、モニタリングがまさにクオリアを生み出すと考える必要はほとんどない。何よりモニタリングは[モニタリングとは]独立に存在するクオリアを主体に覚知させるに過ぎない。繰り返すならば、そもそも内的感覚理論はある[心的]状態を質的なものにする理論ではまったくないのである。(Lycan [1996]: 76-7)

この一節は、その議論の前提をなす意識の高階知覚理論の枠組みのもとに捉えることではじめて十全な理解が得られるものであることから、後段第3章第1節での議論を先取りして高階知覚理論の基本骨子を示すならば、それは、ある心的状態はそれをターゲットとする高階知覚をとまなうことによってはじめて意識的な心的状態となる、といったものであると言える。この高階知覚理論の枠組みのもとに捉え返すならば、この一節におけるライカンの主張は「高階知覚は、高階知覚とは独立に存在しているクオリアを経験主体に覚知させるものであって、クオリアそれ自体をあらたに

生み出すものでない」という趣旨のものであることが明らかとなる(上の一節における「覚知の内的感覚理論」および「高階のモニタリング」はそれぞれ、われわれの言う「意識の高階知覚理論」および「高階知覚」に直接対応するものと言える)。ここでとくに注目したいのは、ライカンの主張の(暗黙の)前提となっている「高階知覚とは独立に存在しているクオリア」と「覚知されたクオリア」というクオリアの種別である。

まず前者の「高階知覚とは独立に存在しているクオリア」について言うならば、このクオリアは高階知覚のターゲットになることではじめて意識化されるものであり、それ自体としてはあくまで無意識的な状態にとどまるものであることから、われわれの理解にしがたうかぎり、厳密に言うならば、本来これはクオリアではないということになる。しかしながら、この「高階知覚とは独立に存在しているクオリア」はそれをターゲットとする高階知覚をとまなうことで、意識化される潜在的可能性を秘めるものであることから、その点を汲んでこれを「潜在的クオリア(potential quale)」と名づけることにする。

ついで後者の「覚知されたクオリア」について言うならば、これは「潜在的クオリア」にそれをターゲットとする高階知覚をとまなうことで意識化されたクオリアであり、その意味でわれわれの理解では、これこそまさに本来の意味でのクオリアということになる。以下では、この勝義でのクオリアとしての「覚知されたクオリア」を「顕在的クオリア(actual quale)」と名づけることで、「潜在的クオリア」との相違を明示するとともに、両者の関係を示唆することにした。

上に挙げたライカンからの一節においてその暗黙の前提をなしている「高階知覚とは独立に存在しているクオリア」と「覚知されたクオリア」という二種のクオリアを、上記のように、それぞれ「潜在的クオリア」と「顕在的クオリア」として捉え返すことで、意識の高階知覚理論、さらには意識の高階表象理論一般のもとでクオリアの成立機序を解明するためのひとつの重要な理論的基盤を得ることができるものと考えられる。

3. 意識の高階表象理論とその種別

序論でも指摘したように、いかなる種類の理論であろうとそれが意識に関する理論であるかぎりにおいて、「心的状態を意識的な心的状態とするのは何か」という問いは、意識の理論にとってきわめて重要な問いをなすと言えるのであるが(Gennaro [2017]: 88)、意識の高階表象理論は一般に、この問いに対して「ある心的状態を意識的なものとするのは、ある種の高階表象である」と答える。すなわち意識の高階理論は、ある心的状態はそれに対してメタ心理的もしくはメタ認知的な状態としてある高階表象をとまなうことによって初めて意識的な心的状態になると考えるのである(Gennaro [2017]: 95-6)。

このように意識の高階理論は、高階表象によって可能となる反省的・メタ心理的自己覚知によって意識的心的状態の概念を分析することを試みるのであるが、それによれば、ある心的状態Mを意識的な状態とするのは、その心的状態Mが、当該意識主体がいま現にそのMという心的状態にあることを内容とする、同時的で非推論的な高階の(すなわちメタ心理的な)状態をとまなっているという事実である。逆に言うならば、ある心的状態はそれに関するしかるべき高階状態を欠くことから無意識的な状態にとどまることになるのである(see Van Gulick [2014]: 52)。

意識の高階表象理論は一般に、ある心的状態を意識的なものとするメタ心的状態の様態の違いに応じて、大きく高階知覚理論(higher-order perception [HOP] theories)と高階思考理論(higher-order thought [HOT] theories)とに二分され、後者はさらに現実主義高階思考理論(actualist higher-order thought theory)と傾性主義高階思考理論(dispositionalist higher-order thought theory)とに下位区分されることになるが(see Carruthers [2011]: 11)、以下ではそれぞれの理論について順に見てゆくことにする。

(1) 意識の高階知覚理論

1) その概要

意識の高階知覚(HOP)理論を提唱する代表的論者に、D. アームストロングとW. ライカンがいるが(Armstrong [1968], Armstrong [1997], Armstrong and Malcolm [1984], Lycan [1987], Lycan [1996])、この高階知覚

理論は、高階の心的状態を一種の「内的感覚(inner sense)」、もしくは「心の内的モニタリングシステム(intra-mental monitoring systems)」と関連づけられる、知覚に類した状態と解する(Van Gulick [2014]: 52, Gennaro [2012]: 49-53, Gennaro [2017]: 105-7, see also Armstrong [1997], Lycan [1987], Lycan [1996])。

高階知覚理論はそれが知覚をモデルとするものであることから、ある心的状態を意識的なものとするメタ状態は非推論的であり、一階の心的対象と同時的に生起するものであることを説明するにあたって好適であると言える。すなわちわれわれは、いままさに生起している心的出来事を非推論的に知覚するのであるが、こうした事態について高階知覚理論は(本稿第3章第2節に見る高階思考理論以上に)的確に説明することができると思なされるのである(Van Gulick [2014]: 52-3)。

意識の高階知覚理論によれば、われわれは外界と内界(=身体の状態)に関する一階の非概念的・アナログ的な知覚を有するのみならず、この一階の知覚状態に関する二階の非概念的・アナログ的な知覚を有することになる(Carruthers [2011]: 11-2)¹³。

意識の高階知覚理論にとってその要となる作用は、一階の知覚状態に対する「内的感覚」にあることから、これを「内的感覚理論(inner-sense theory)」¹⁴と呼ぶことも可能となるが、この「内的感覚理論」の基本的主張は「一階の心的状態はアナログで非概念的な志向的内容をもった状態であり、この一階の心的状態がそれをターゲットとする高階知覚をともなうことで、それは現象的に意識的な心的状態となる」といったものと解される(cf. Carruthers [2011]: 13)。

この「内的感覚理論」によれば、アナログな内容をもったある一階の心的状態をその主体に利用可能なものとするのは、内的感覚の作用によって生み出された高階の知覚内容であるということになる。そして、こうした高階の知覚内容が一階の心的状態の主観的次元(subjective dimension)もしくは「感じ(feel)」を構成し、それによって一階の心的状態は現象的に意識的なものとなる(Carruthers [2011]: 13)。

2) 高階知覚理論に対する批判

意識の高階知覚理論に対しては、意識の一階理論および意識の高階思考理論の立場から数多くの批判が寄せられているが(See Van Gulick [2014]: 52-4, Carruthers [2011]: 15-7, 35-45, Gennaro [2012]: 49-53)¹⁵、ここではそれらのうちとりわけ重要と思なされる二つの批判を取り上げるとともに、それらの批判に対する応答の可能性を探ることしたい。

[1] 内的感覚のような器官は存在しない

ここで最初に取り上げる高階知覚理論に対する批判は、「高階知覚(内的感覚)を司る器官は存在しない」というものである(この批判はとくに高階思考論者から提起されている。See Van Gulick [2014]: 52, cf. Rosenthal [2005]: 105, 182)。すなわち、視覚や聴覚のような外的感覚にはそれぞれ対応する感覚器官が存在するのに対し、内的感覚としての高階知覚にはそれぞれ対応する感覚器官が存在しない以上、これを実体的能力と思なすことはできず、そのかぎりにおいてこの高階知覚という能力に依拠する高階知覚理論を支持することはできないというのがその批判の趣意となる。

こうした批判に応じてアームストロングはArmstrong [1968]において以下のように述べる。

いかなる感覚器官(sense-organ)も関係しないことから、内観[高階知覚]を感覚知覚(sense-perception)になぞらえることはできないとしばしば論じられる。われわれは「自分の目で[ものを]見る(I see with my eyes)」と言うが、それによって自分が[いままさに何かを]考えていることを見出すと言えるようなものは存在しない。とはいえ、たとえ感覚知覚との差異が明らかにされたとしても、私にはこの反論がそれほど重きをなすとは思えない。いずれにせよ、何か[の感覚器官]によって知覚するとは言わない一種の感覚知覚が存在する。それは身体知覚(bodily perception)である。自分に熱があると覚知するとき、あるいは自分の足が動いている覚知するとき、私はこの知識を[自分の体に]触ってみることで得るわけではない。それによってこれらの事柄を知覚と言えるような器官は存在しないのである。それにもかかわらず、どの心理学の教科書もこれらを感じ覚知覚の事例として取り上げてきた。(Armstrong [1968]: 95-6)

この一節においてアームストロングは、確かに内観（高階知覚）に対応する感覚器官は存在しないが、これは何も内観（高階知覚）にかぎった話ではなく、「身体感覚」もまた対応する感覚器官をもたないにもかかわらず、それでもなお知覚の一種に数えられてきた（のであるから内観〔高階知覚〕もまた、それに対応する感覚器官が存在しないとしても、それを知覚の一種として捉えることは十分可能である）と応ずる。

ここでアームストロングの言う「身体感覚」は、今日の生理学で言うところの「体性感覚 (somatic sensation)」に相当すると見なされるが、体性感覚は今日一般に以下のように定義されている。

体性感覚 (somatic sensation) とは触覚、温度感覚、痛覚の皮膚感覚と、筋や腱、関節などに起こる深部感覚から成り、内臓感覚は含まない。皮膚感覚が皮膚表面における感覚であるのに対し、深部感覚とは身体内部の感覚を意味する。後者は固有感覚または自己受容感覚とも呼ばれ、筋受容器からの伸縮の情報により、身体部位の位置の情報が得られる。(橋本、入来 [2012])

この体性感覚については今日それぞれ対応する感覚受容器および中枢機構が明らかとされていることから(橋本、入来 [2012]、大山、今井、和気 [1994]: 1185-8, 1192-3)、確かに感覚器官それ自体ではないものの当該感覚に関してそれと同等の機能を果たす感覚受容器が存在する以上、「感覚器官」をそうした感覚受容器をも含めた広義で捉えたとするならば、「身体感覚」については対応する感覚器官が存在しないとするアームストロングの理解は端的に誤っているとわざわざを得ない。したがってアームストロングが対応する感覚器官を欠くにもかかわらずなお知覚に数えられる「身体感覚」の存在を論拠に内観（高階知覚）の存在を認めようとするのであれば、彼のそうした主張は到底受け入れがたいものとなる。

Armstrong [1968]における議論の不備を認めたためか、アームストロングはArmstrong and Malcolm [1984]においては、温度感覚、自己受容感覚 (proprioception) 等の「身体知覚」に関しても対応する感覚器官が存在することを認めたとうえで(Armstrong and Malcolm [1984]: 111)、以下のように述べる。

〔高階知覚理論に対して〕つぎのような異議が唱えられるかもしれない。すなわち、内観的覚知に結びつけられる感覚器官 (sense-organs) はもとより受容器 (receptors) さえ存在せず、したがって少なくとも内的感覚に関するロックとカントのメタファーはほとんど役に立たない、というものがそれである。確かに、目が視覚的情報をもたらすためにその向きを変えるような仕方で、内観的覚知 (introspective awareness) をもたらすために操作される (manipulated) いかなる感覚器官も内的装置 (internal apparatus) も存在しないように見える。おそらく、自己受容的器官 (proprioceptive receptors) が存在するという意味では、受容器すら存在しないことであろう。しかしながら、少なくとも唯物論者は、それによって心が自身の現在の状態と過程のいくつかのものに気づくことになる、さまざまな因果連関をとまなう、多かれ少なかれ複雑な種類の機構が存在すると想定することであろう。(Armstrong and Malcolm [1984]: 112)

アームストロングはこの一節において、高階知覚(内的感覚)を司る感覚器官や受容器が存在しないことを認めながらも、なお唯物論的立場(さらに特定化するならば、彼の信奉する「中枢状態唯物論 (central-state materialism)」¹⁶の立場)から高階知覚(内的感覚)の作用を可能とする脳内機構が存在する可能性を主張する。

あらためて言うまでもなく、高階知覚(内的感覚)の作用を可能とする脳内機構は少なくとも現時点ではいまだ発見されていない。しかしながらここで問題となるのは、そうした状況下で高階知覚(内的感覚)の作用を可能とする脳内機構の存在を想定することははたして妥当と言えるのか、別言するならば、そうした脳内機構はそもそも原理的に可能であると見なされるのかという点である。

この問題を考えるにあたって重要な示唆を与えてくれるのが、脳神経学者のロウと現実の高階思考理論を唱道する哲学者ローゼンタールが共同執筆した論考「意識的覚知に関する高階理論に対する経験的支持」(Lau and Rosenthal [2011])である。本論考においてロウらは脳神経科学のさまざまな知見をもとに意識に関する高階表象理論の擁護に努めているのであるが、その一環として彼らは「高階表象は主として前部前頭葉皮質 (prefrontal cortex) と頭頂葉皮質 (parietal cortex) の活動に依存する」と主張する(Lau and Rosenthal [2011]: 365r-6l,

cf. Kriegel [2009]: 236-43, LeDoux and Brown [2017])。

もとより彼らのこの主張は、あくまで高階表象一般に関する発言であって、とくに高階知覚(内的感覚)に言及したのではなく、またそれは高階表象に関係する脳の部位を特定化するものであって、高階表象を可能としている脳内機構を明らかにするものではない。しかしながらそれでもなお、高階知覚(内的感覚)が高階表象のひとつとしてそのもとに包摂されるものであり、また高階表象に関係する脳の部位が特定されうとするならば、それらの部位が高階表象を可能とする脳内機構に直接与るものであると見なされることになる。したがってロウらの主張をもとに、少なくとも高階知覚(内的感覚)を可能とする脳内機構が存在するという可能性だけは十分保証される、別言するならば、その存在が物理的に不可能(physical impossible)なわけではないと考えられる。

高階知覚(内的感覚)を可能とする脳内機構が現時点では発見されておらず、したがってそのメカニズムの解明もまったくなされていないことは紛れもない事実である。しかしながら、上述のように少なくともそうした脳内機構の存在する可能性が認められる以上、「高階知覚(内的感覚)を司る器官は存在しない」、あるいはここでの論脈のもとで捉え返すならば、「高階知覚(内的感覚)を可能とする脳内機構は存在しない」と一方的に論断することで高階知覚(内的感覚)の存在を否定し去るとするならば、それ自体が独断の謬りを免れえないであろう。

以上の議論を総括するならば、たしかに高階知覚(内的感覚)を司るような感覚器官(もしくはそれと同等の機能を担う受容器)は存在しないが、少なくとも高階知覚(内的感覚)を司る脳内機構が存在する可能性は認められることから、それを論拠に高階知覚理論は擁護可能であると結論づけられることになる¹⁷。

[2] 内的感覚(高階知覚)に特有の現象学(現象的性格)は存在しない

つぎに取り上げる高階知覚理論に対する批判は、「内的感覚(高階知覚)に特有の現象学(現象的性格)は存在しない」というものである。

高階知覚理論に対してこうした批判をおこなう代表的論者に現実的高階思考理論を唱道するローゼンタールがいる(Rosenthal [1997]: 740, Rosenthal [2002]: 409, Rosenthal [2005]: 105, cf. Rosenthal [2005]: 182-3,

Carruthers [2000]: 212)。そこで以下ではRosenthal [2002]において展開される高階知覚理論に対するローゼンタールの批判を詳しく見ておくことにしよう。

ローゼンタールは、高階知覚理論のもつ長所として、われわれがそれを知覚することによって自己のもつ心的状態を意識するとしたならば、意識的心的状態のもつ質的次元(qualitative dimension)はそうした高階知覚によって説明することができるという点を挙げる。しかしその一方で彼は、今度はこの高階知覚のもつ質的次元それ自体が説明されなければならないため、高階知覚理論による説明は結局のところ問題をたんに先延ばしにするに過ぎないとして、高階知覚理論を批判する(Rosenthal [2002]: 409)。そして高階知覚理論に対する批判をさらに展開して、以下のように述べる。

高階の感覚作用(higher-order sensing)は〔それに〕特徴的な心的性質(mental qualities)を示さなければならぬだろうが、それらはいかなる性質なのであろうか。ひとつの可能性は、高階知覚とわれわれが知覚する状態の両者は同一の感覚質(sensory quality)¹⁸を示すというものである。しかしこれは理論的に理に適ったものではない(unmotivated)。われわれが何かを知覚するとき、われわれの知覚的状態の帯びる性質はわれわれが知覚する対象のもついかなる特性とも異なったものである。たとえばわれわれがトマトを見ると、われわれの感覚が帯びる赤さはトマトのもつ赤さという特性と同じものではない。したがって高階の性質がわれわれもつ低階の〔心的〕状態の帯びる性質と同じものであると考える根拠はない。(Rosenthal [2002]: 409)

この一節でローゼンタールは高階知覚の具える感覚質がいかなるものでありうるかを問題とし、まずは「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という理解を取り上げ、それを検討に付すが、一階の知覚においてその知覚の具える感覚質は知覚対象のもつ特性と同一ではないことを理由に、高階知覚の具える感覚質に関するこの第一の理解を斥ける。すなわち、高階知覚もまた知覚であることから、一階の知覚においてその知覚の具える感覚質が知覚対象のもつ特性と同一ではないとするならば、高階知覚においてもまたその知覚の具える感覚質はその知覚対象となる

一階の知覚のもつ特性としての感覚質とは同一ではないと推断されることになるのである¹⁹。

ついでローゼンタールは高階知覚の具える感覚質に関する第二の理解、すなわち「高階知覚の具える感覚質と一階の知覚の具える感覚質とは別個のものであり、それは高階の感覚質である」という理解を取り上げ、それについて以下のように論ずる。

しかしながら、もし高階の性質〔感覚質〕と低階のそれとが別個のものであったとするならば、こうした高階の性質〔感覚質〕がいかなるものでありうかが謎 (mystery) となってしまう。われわれの一階の感覚状態を特徴づける心的性質以外に、われわれの心的生活 (mental lives) においていかなる心的性質があるというのだろうか。そして仮に高階の性質が一階の性質と同一でもなければ別個のものでもないとするならば、それによってわれわれが自己の意識の状態を意識することになる高階状態は一切の性質をもちえないことになる。しかし、もしこれらの高階状態が質的特性 (qualitative properties) をもたないとするならば、この高階状態はただたんにある種の志向的な高階状態 (higher-order intentional states) としてのみ可能となることであろう。(Rosenthal [2002]: 409)

この一節におけるローゼンタールの議論を敷衍するならば以下ようになる。

仮に「高階知覚の具える感覚質と一階の知覚の具える感覚質とは別個のものであり、それは高階の感覚質である」という第二の理解を受入れたとするならば、それではそうした高階の感覚質とは具体的にはいかなるものであるかがただちに問題となる。少なくともローゼンタールの理解では、一階の知覚の具える感覚質以外にそもそもその候補となりうる感覚質は存在しえないことから、ここに言う一階の知覚の具える感覚質とは別個の高階の感覚質はまったく不可解なひとつの「謎」になってしまう。

こうしてローゼンタールは高階知覚の具える感覚質に関する第二の理解を拒否することになる。しかしながらそのとき、仮に高階知覚の具える感覚質に関する理解として上記の二つの理解しか可能でないとしたならば、両者の理解はいずれも支持しがたいものであることから、高階知覚はいかなる感覚質も具えないということになってしまう。しかし、知覚

はつねに何らかの感覚質を具えるものであることから、高階知覚がいかなる感覚質も具えないとするならば、本来それは知覚ではなく、知覚とは別個の「志向的な高階状態」であると結論づけられることになる。

以上のことから、ローゼンタールは最終的に意識に関する高階知覚理論を斥け、それに代わるものとして自らが与する(現実的)高階思考理論を奨揚することになる(Rosenthal [2002]: 409)。それでは意識の高階知覚理論に対してローゼンタールが向けるこうした批判に対してはいかなる応答が可能であろうか。

この第二の批判に対する応答として第一に取り上げるべきは、アームストロングとならんで高階知覚理論を唱道する代表的論者であるライカンによるものであると言える。そこで以下では、彼の議論(Lycan [1996]: 27-30)を取り上げ、そこで展開される第二の批判に対する応答について見てみることにする(上に挙げたローゼンタールの批判[Rosenthal [2002]: 409]をその直接のターゲットとするライカンの応答は、その前提作業としてローゼンタールの議論を明確なかたちで再構成するものとなっていることから、以下ではその点も含めて彼の議論を紹介することにした)。

ライカンはまずローゼンタールの批判の基本的枠組みをなすその論証方式をあらためて確認するかたちで以下のように述べる。

知覚がつねに何らかの感覚質をともしない、また内的モニタリング〔高階知覚〕が知覚であるとするならば、確かに内的モニタリング〔高階知覚〕それ自体が何らかの感覚質をともしなければならぬということになる。(Lycan [1996]: 28)

このライカンからの一節をもとにローゼンタールの議論の前提的枠組みをなす論証を再構成してみるならば、それは以下に示す三段論法によって示されることになる。

【大前提】すべての知覚は何らかの感覚質を具える。

【小前提】内的モニタリング(高階知覚)は知覚(の一種)である。

【結論】内的モニタリング(高階知覚)は何らかの感覚質をともしなう。

この論証を受け入れ、かつ高階知覚にともしなう感覚質に関しては上記の二つの理解しか可能でないとするならば、ここにひとつのデレンマが生ずることになる。

ここで感覚質に関する二つの理解をあらためて示すならば、それは以下のようなものであった。

(1)高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである。

(2)高階知覚の具える感覚質と一階の知覚の具える感覚質とは別個のものであり、それは高階の感覚質である。

上に見たように、ローゼンタールによれば、高階知覚にともなう感覚質に関する(1)と(2)の理解はいずれも受け入れがたいものであり、そのかぎりにおいて両者はディレンマを形作る二つの角となる。上に見たようにローゼンタールは、こうしたディレンマが生ずる淵源が一階の知覚を意識的なものとする高階状態を知覚(の一種)と見なす高階知覚理論それ自体のうちにあると考え、最終的にこの高階知覚理論を斥けることになる。

以上ライカンの論述に依拠して高階知覚理論に対するローゼンタールの批判を再構成するかたちであらためて示したのであるが、このローゼンタールの批判に対してライカンは以下のように応ずる。

これ[ローゼンタールの批判]に対する私の主たる応答は、[知覚はつねに何らかの感覚質をともなうという]ローゼンタールの最初の主張を内的モニタリングにまで拡張することを拒絶することにある。内観理論家(少なくともアームストロングと私)は、内的モニタリングは個々のすべての点にわたって外的知覚に類似していると主張することはない。殊にわれわれは、内的モニタリングがそれ自身の作用レベルにおいて何らかの呈示された感覚質をともなう特性を[外的知覚と]共有すると想定すべきではない。というのも一階の状態において呈示される感覚質は、私の理解では[…]、物理的対象のもつ表象された特徴(the represented features of physical objects)だからである²⁰。たとえば、(一階の)視知覚(visual perception)において呈示される色彩は、物理的対象のもつ表象された色彩なのである。一階の状態それ自体は、物理的対象が環境との関係において(ecologically)もつような重要な特徴をもたず、したがってわれわれは、一階の状態に関する内的表象(internal representation)が[物理的対象はもつが一階の状態はもたない]そうした特徴を表象する、あるいはそうした特徴に対応すると想定することはないであろう。(Lycan [1996]: 28-9)

この一節においてライカンはまず、ローゼンタールの批判に対して応答するにあたっての基本戦略として、「知覚はつねに何らかの感覚質に関わる」というローゼンタールの主張を高階知覚にまで拡張することを拒絶することを提案するのであるが、より具体的に述べるならば、この提案は「一階の知覚はすべて何らかの感覚質をともなうが、高階知覚は必ずしも何らかの感覚質をともなうわけではない(感覚質をともなわない高階知覚も存在する)」という主張を含意することになる。

こうした主張を含意するライカンの提案はあらためて言うまでもなく、以下に再掲するローゼンタールの議論の前提的枠組みをなす論証それ自体を拒絶することを意味する。

【大前提】すべての知覚は何らかの感覚質を具える。

【小前提】内的モニタリング(高階知覚)は知覚(の一種)である。

【結論】内的モニタリング(高階知覚)は何らかの感覚質を具える。

より具体的に述べるならば、この論証の拒絶は**【大前提】**「すべての知覚は何らかの感覚質を具える」を「一階の知覚はすべて何らかの感覚質を具える」に変更することによっておこなわれるが、この変更をとおして先の論証全体は以下のものにとって代わられることになる。

【大前提】一階の知覚はすべて何らかの感覚質を具える

【小前提】内的モニタリング(高階知覚)は(知覚の一種ではあるが)一階の知覚ではない。

【結論】すべての内的モニタリング(高階知覚)が何らかの感覚質を具えるわけではない(感覚質を具えない内的モニタリング[高階知覚]も存在する)。

このあらたな論証の**【結論】**にしたがうならば、高階知覚は、感覚質を具えるものと感覚質を具えないものと大きく二分されることになる。感覚質を具えない高階知覚に関して言うならば、高階知覚にともなう感覚質をめぐるディレンマは、あくまで高階知覚には感覚質がともなうという前提を受け入れたうえで、その感覚質が具体的にいかなるものであるかという問題をめぐって生じたものであることから、感覚質を具えない高階知覚に関してはそもそも件のディレンマは問題となりえず、それが問題となるのはあくまで感覚質を具える高階知覚であるということになる。そこでライカンは、上に挙げた一節の後半(「というも」以下の箇所)において、この感覚質をともなう高階知覚をめぐるディレンマを形作る第一の角に対する応答を試みる。

ここでのライカンの記述は極度に圧縮されたものであり、そのままのかたちではどうしてそれが第一の角に対する応答となるかをただちにみて取ることが難しいため、この後半部分を順を追って丹念に読み解いてみるならば、以下のようになる。

- ①一階の知覚の具える感覚質は、物理的対象のもつ特性を表象する。
- ②たとえば一階の知覚の具える「赤」の感覚質(赤のクオリア)は、物理的対象としてのトマトのもつ「赤さ」という特性(物理的赤²¹)を表象する。
- ③物理的対象は「広い特性(wide property)」²²をもつ(したがって物理的対象としてのトマトのもつ「赤さ」という特性〔物理的赤〕は「広い特性」であるということになる)。
- ④一階の知覚それ自体は「広い特性」をもたず「狭い特性」をもつ。
- ⑤したがって一階の知覚の具える(現象的特性としての)感覚質は「狭い特性」であるということになる。
- ⑥高階知覚²³は「狭い特性」をもつ一階の知覚(より正確に言うならば、一階の知覚の具える「狭い特性」としての感覚質)を表象することから、高階知覚の具える感覚質が物理的対象のもつ「広い特性」(物理的赤)を表象するとは考えられない。
- ⑦上に見たように、一階の知覚の具える感覚質が物理的対象のもつ特性(物理的赤)を表象するのに対し、高階知覚の具える感覚質は物理的対象のもつ特性(物理的赤)を表象しないとするならば、一階の知覚の具える感覚質と高階知覚の具える感覚質とは別個のものであるということになる。

以上、先に挙げたライカンからの一節の後半部分を再構成して示したのであるが、ここから明らかとなるように、ライカンは、一階の知覚の具える感覚質の表象対象と高階知覚の具える感覚質のそれとが異なることを論拠に、高階知覚が帯びる感覚質を巡るディレンマの第一の角をなす「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という理解を斥けることになる。

ついでライカンは、高階知覚が帯びる感覚質を巡るディレンマの第二の角を取り上げ、それに関して以下のように論ずる。

私は前節を締めくくるにあたり[see Lycan [1996]: 27]、内観はあるアスペクトのもとで、もしくはある方式(way)においてあるものとして一階の状態を表象し、この「方式」は疑いなく一階の状態自身の帯びるクオリアもしくは感覚質と何らかの関係をもつことを認めた。したがってローゼンタールの「心的性質(mental quality)」という用語がその本来の意味である「感覚質」よりも広く捉えられるとするならば、彼の挙げるディレンマの第二の角を捕まえることも可能であるし、一階の感覚的状態に関するすべてのスキミングは何らかのそれとは異なった心的性質を「ともない(involve)」、その心的性質もまた別の仕方で一階の感覚質に関係づけられることになる。(Lycan [1996]: 29)

ライカンはこの一節において、本来感覚質を意味する「心的性質」というローゼンタールの用語の意味を拡大することを提案し、心的性質を一階の状態を表象するアスペクト(すなわち一階の知覚を表象するために設定されるある一定の視角もしくはパースペクティブ)もしくは方式(一階の知覚を表象する様態)をも包含するものとして捉え返すのであるが、このことによって高階知覚にともなう感覚質を巡るディレンマの第二の角は撓められることになる。すなわち、高階知覚の具える感覚質が一階の状態を表象するアスペクトや方式として捉え返されることで、それが一階の知覚の具える感覚質とは別個のものと位置づけられるとともに、高階知覚の具える感覚質が特定化されることで、高階知覚の具える感覚質めぐる「謎」は解消されることになるのである。

こうして高階知覚の具える感覚質を巡るディレンマの第一の角をなす「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という理解が斥けられるとともにその第二の角が撓められることで、高階知覚の具える感覚質を巡るディレンマは解消され、延いては高階知覚理論に対するローゼンタールの批判は斥けられることになる。

以上意識の高階知覚理論に対するローゼンタールによる第二の批判に対するライカンの応答について見てきたのであるが、以下ではその個々の論点に関して批判的考察を加えることにしたい。

まずは、ローゼンタールの批判に対して応答するにあつての基本戦略となる「知覚はつねに何らかの感覚質に関

わる」というローゼンタールの主張を高階知覚にまで拡張することを拒絶するライカンの提案について取り上げよう。

上にも述べたように、このライカンによる提案は取りも直さず、ローゼンタールの議論の前提的枠組みをなす論証それ自体を拒絶し、それに代わるものとして以下に再掲する論証を呈示することを意味する。

【大前提】一階の知覚はすべて何らかの感覚質を具える。

【小前提】内的モニタリング(高階知覚)は(知覚の一種ではあるが)一階の知覚ではない。

【結論】すべての内的モニタリング(高階知覚)が何らかの感覚質を具えるわけではない(感覚質を具えない内的モニタリング[高階知覚]も存在する)。

このあらたな論証自体は極めて健全なものであり、論証として何の瑕疵もないと言える。問題はその【結論】に示される、内的モニタリング(高階知覚)と感覚質との関係に関するあらたな理解にある。

この【結論】は、内的モニタリング(高階知覚)と感覚質との間の必然的な関係を否定するものであるが、仮に感覚質を欠いた内的モニタリング(高階知覚)が存在するとして、そうした感覚質を欠いた内的モニタリング(高階知覚)はなお「高階知覚」と呼ぶに値すると言えるのだろうか。もしこの問いに「否」と応えるならば、内的モニタリング(高階知覚)は知覚、もしくは知覚に類したものではないということになり、高階知覚理論が拠って立つところの基本的前提基盤それ自体(そもそも内的モニタリングが知覚の一種として捉えられるからこそ、その理論は「高階知覚理論」と呼ばれるのである)を切り崩す自家撞着に陥ることになる。

逆に先の問いに「然り」と答えるとするならば、感覚質との関係において知覚一般をあらたに捉え返す必要に迫られることになる。なぜならば、一階の知覚は必然的に何らかの感覚質を具えるものの、内的モニタリング(高階知覚)はそうではないとするならば、(一階の知覚と高階の知覚とからなる)知覚一般と感覚質との間に必然的な関係はないということになるからである。したがって仮にこうした理解を受入れるとするならば、知覚とは本質的に、感覚質とは切り離された純粹認知、すなわち外界および内界(自己の身体)の情報を取得するに過ぎない認知作用(視知覚にかぎって言うならば、本稿第2章で取り上げた無意識的視知覚としての「盲視(blindsight)」がこの純粹認知にあたる)であるということになるが、少なくともわれわれの直観に照らすかぎり、こうした理解はにわかには受け入れがたいものと言

わざるを得ない。というのも知覚を本質的に感覚質とは切り離された純粹認知と理解するとき、「盲視」をその典型的事例とする無意識的知覚(すなわち厳密に言うならば「知覚」ではなく、せいぜいのところが「準知覚(quasi-perception)」として捉えるべき認知作用)が知覚における例外的なケースではなく、知覚の本態と見なされることになってしまうからである。

「知覚はつねに何らかの感覚質に関わる」というローゼンタールの主張を高階知覚にまで拡張することを拒絶するライカンの提案に関する以上の議論を総括するならば、以下のようなことになる。

ライカンの提案を採用するならば、確かに感覚質を具えない内的モニタリング(高階知覚)にかぎって言えば、上に挙げたディレンマを回避することができる。しかしその反面、ライカンの提案は、内的モニタリング(高階知覚)と感覚質との必然的な関係を否定することで、高階知覚理論が拠って立つところの基本的前提基盤それ自体を切り崩してしまう恐れがあるとともに、彼の提案を一般化して捉えるならば、それは知覚一般と感覚質との間の必然的な関係の否定を含意するものであることから、知覚に関するこうした理解がはたして妥当なものと言えるのかという点に関して、大いに疑問が残るものと結論づけられることになる。

つぎに、「心的性質」というローゼンタールの用語の意味を拡大し、一階の状態を表象するアスペクトもしくは方式として捉え返すライカンの提案を取り上げることにしよう。

一階の状態を表象するアスペクトや方式は、たしかに一階の知覚にともなう感覚質に関わるものと見なされはするものの、それ自体はあくまで一階の知覚を表象するために設定されるある一定の視角ないしパースペクティブ、あるいは一階の知覚を表象する様態であって、断じて感覚質ではなく²⁴、そうしたアスペクトや方式のもとに一階の知覚が高階知覚によって表象されることで、一階の知覚にともなう感覚質とはまた別の第二の感覚質が生起するに過ぎない。本来問題とすべきは高階知覚にともなうこの第二の感覚質なのであって、一階の心的状態を表象する際に高階知覚によって採られるアスペクトや方式ではないにもかかわらず、ライカンはこの第二の感覚質について論及することはないため、結局のところそれは「謎」のままとどまることになる²⁵。したがって、ローゼンタールの言う「心的性質」を一階の状態を表象するアスペクトもしくは方式として捉え返すライカンの提案は、たんに問題をすり替えるだけのものに過ぎず、高階

知覚が帯びる感覚質を巡るディレンマの第二の角を撓めるまでにはいたらないと結論づけられることになる。

以上ローゼンタールによる第二の批判に対するライカンの応答を構成する個々の論点に関して批判的考察を加えてきたのであるが、そこでの議論を踏まえ、ライカンの応答に対して最終的な論評を下すならば、以下ようになる。

「知覚はつねに何らかの感覚質に関わる」というローゼンタールの主張を高階知覚にまで拡張することを拒絶するライカンの提案にしたがえば、高階知覚は、感覚質をともなうものと感覚質をともなわないものと大きく二分されることになるが、感覚質をともなわない高階知覚について言うならば、ライカンの提案を採用することで、確かに高階知覚にともなう感覚質を巡るディレンマを回避することが可能となる。しかしその一方で、ライカンの提案は、高階知覚理論が拠って立つところの基本的前提基盤それ自体を切り崩してしまう恐れがあるとともに、この提案が含意する知覚に関するあらたな理解の妥当性についても大いに疑問が残るものにとどまる。また、感覚質をともなう内的モニタリング(高階知覚)について言うならば、ライカンは、高階知覚が帯びる感覚質を巡るディレンマの第一の角をなす「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という理解を斥ける一方で、高階知覚の具える感覚質めぐる「謎」を解くことでその第二の角を撓め、それによってディレンマを解消を狙うのであるが、結局のところ第二の角を撓めるまでにはならず、ディレンマはそのまま残存することになる。

以上の点から総合的に判断するならば、ローゼンタールによる第二の批判に対するライカンの応答は最終的に失敗に終わっていると結論づけられることになる。

ローゼンタールによる第二の批判に対するライカンの応答が不首尾に終わっていることを承けて、ここでは本稿が依拠する基本的理論構制のもとでライカンはまた違った方向からあらためてローゼンタールによる第二の批判に対する応答を企てることにする。その応答の要点は、ローゼンタールの議論の前提的枠組みとなっている論証の大前提をなす「すべての知覚は何らかの感覚質を具える」という理解を受け入れたうえで、高階知覚の具える感覚質を巡るディレンマの第一の角をなす「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という理解を斥けるとともに、その第二の角を受け入れることでディレンマの解消を目指す点にある。

ローゼンタールによる第二の批判に対して応答を試みるに先立ち、ここであらためてディレンマを構成する第二の角について確認しておくならば、それは「高階知覚の具える感覚質と一階の知覚の具える感覚質とは別個のものであり、それは高階の感覚質である」というものであった。この命題を分析的に捉えるならば、それが以下の二つの命題の連言からなることが明らかとなる。

①高階知覚にともなう感覚質と一階の知覚にともなう感覚質とは別個のものである。

②高階知覚にともなう感覚質は高階の感覚質である。

したがってこの第二の角を受け入れるということは、上の①と②の命題をともに受け入れることを意味するが、あらためて言うまでもなく、一階の知覚が具える感覚質はあくまで一階の感覚質であって高階の感覚質ではありえないことから、②の命題を受け入れるということは同時に①の命題を受け入れることを含意することになる²⁶。そのためここで問題とすべきは②の命題であるということになるが、ここでとくにその問題の焦点をなすのは、ここに言う「高階の感覚質」が具体的にいかなるものであるかという点であり、この高階の感覚質の実態を明示することでその謎めいた性格を解消することこそまさにここでの課題ということになる。

以上の基本方針に則ってローゼンタールによる第二の批判に対するわれわれの応答を呈示するならば、それは以下のようなものとなる。

経験主体がある対象(たとえば「トマトの赤さ」)を知覚するとき(一階の知覚)、その経験主体はある心的状態に置かれることになるが、この心的状態は必然的に何らかの(潜在的クオリア²⁷としての)感覚質(これを「感覚質₁」と表記する)を具えるものと考えられる²⁸。この潜在的クオリアとしての感覚質₁に、その感受を作用内実とする二階の知覚がともなうとき、感覚質₁は意識化され、それによって本来の意味での感覚質、すなわち顕在的クオリアとして現勢化することになる。ローゼンタールの議論の前提的枠組みをなしている論証の【大前提】に言うように、すべての知覚は何らかの感覚質(潜在的クオリア)を具えることから、潜在的クオリアとしての感覚質に対する二階の知覚もまた、それが知覚の一種と見なされるかぎりにおいて、感覚質₁とはまた異なった、何らかの(潜在的クオリアとしての)感覚質(これを「感覚質₂」と表記する)をともなうことになる²⁹。

上にも述べたように、ここであらためて問題となるのは、「高階の感覚質」としての感覚質₂とは具体的にいかなるも

のであるかという点であるが、この点については以下のように応ずることができる。

二階の知覚が具える潜在的クオリアとしての感覚質₂は、対象に対する一階の知覚の具える顕在的知覚的クオリアとしての感覚質₁を経験主体としての自己がどのように感受しているか、あるいは別言するならば、その感覚質₁が経験主体としての自己にとってどのようなものとしてあるか、すなわち経験主体としての自己と一階の知覚の具える「感覚質₁」との間に成立するある特定の関係様態を潜在的な仕方で表象するものと考えられる³⁰。この点について具体例を挙げて説明するならば、対象としてのトマトに対する一階の知覚の具える「赤さ」という感覚質₁にその感受を作用内実とする二階の知覚がともなうとき、その二階の知覚にともなう、たとえば「あざやかさ」、「みずみずしさ」、「けばけばしさ」、「どぎつさ」、さらには「不安」、「怖れ」、「おいしさ」、「かわいらしさ」、「めでたさ」といった感覚質₂は、「赤さ」という感覚質₁を経験主体としての自己がどのように感受しているか、あるいは「赤さ」という感覚質₁が経験主体としての自己にとってどのようなものとしてあるか、すなわち経験主体としての自己と一階の知覚の具える「赤さ」という「感覚質₁」との間に成立するある特定の関係様態を潜在的な仕方で表象する、ということになる。

以上本稿における基本的理論構制に依拠することで、ローゼンタールによる高階知覚理論に対する第二の批判に対してあらたな応答を試みてきたのであるが、高階の感覚質としての感覚質₂の内実を明示するこの応答によるならば、その第一の角を断ち切るとともに感覚質₂に纏わる「謎」を解くことで、高階知覚の具える感覚質を巡るディレンマを解消することが可能となり、それによって延いては、ローゼンタールによる第二の批判それ自体が斥けられることになる。

* * *

本稿第3章第1節第2項においては、意識の高階知覚理論に対して寄せられた数々の批判のうちとりわけ重要と見なされる「内的感覚を司る器官は存在しない」という批判と「内的感覚(高階知覚)に特有の現象学(現象的性格)は存在しない」という批判を取り上げ、それぞれの批判に対する応答の可能性を探ってきたのであるが、本項での考察をとおして、いずれの批判に対してもしかるべき蓋然性

を具えた応答が可能であり、そのかぎりにおいて、それらの批判にもかかわらず、少なくともその基本構制においては高階知覚理論は理論的妥当性を保持しうるものであることが確証された。

(2) 意識の高階思考理論

本節では、高階知覚理論とならんで意識の高階表象理論を代表する理論である高階思考(HOT)理論について論ずることとするが、高階知覚理論が意識の高階状態を知覚に類したものと見なすのに対し、この高階状態を信念に類したものと見なすのが高階思考理論であると言える。

本稿第3章の冒頭でも述べたように、高階思考理論は、一階の状態と高階の思考との関係を現実の関係を捉えるかあるいは利用可能な関係を捉えるかに応じて、現実主義的高階思考理論と傾性主義的高階思考理論とに大きく二分されることになる。このうち前者にあつては、ある一階の心的状態が意識的なものとなるのは、その状態が実際に高階思考の現実のターゲットになることによってであると見なされるのに対し、後者にあつては、一階の心的状態が高階思考を生み出すよう傾性づけられることによってそれは意識的な状態になると見なされる。以下ではこの現実主義的高階思考理論と傾性主義的高階思考理論について順を追って個々に考察をおこなうことにしたい。

1) 現実主義的高階思考理論

高階思考理論のうち本項ではまず現実主義的高階思考理論について考察をおこなうことにしよう。

ローゼンタール(Rosenthal [1997], Rosenthal [2002], Rosenthal [2005])に代表される現実主義的高階思考理論の信奉者は、ある心的状態を意識的なものとする高階表象は内的感覚や内的モニタリングシステムのような知覚に類したのではなく、概念的な思考、すなわちある種の概念的成分を含んだ認知的状態であると考え(Gennaro [2017]: 96)。現実主義的高階思考理論に関するこの導入的理解を敷衍するかたちで、ここでは主としてCarruthers [2011]におけるカルーザースの記述(Carruthers [2011]: 18-25)とGennaro [2017]におけるジェナットの議論(Gennaro [2017]: 95-104)に依拠することで、その基本的理論構制を押さえておくことにしたい(see also Gennaro [2012]: 28-33)。

現実主義的高階思考理論の基本的主張は、「私の意

識的な心的状態Mは「私はMの状態にある」という現勢化された信念(それ自体は一般に無意識的である)を非推論的な仕方(non-inferentially) 現実を引き起こす状態である」といえる(Carruthers [2011]: 18)。したがって現象的意識(phenomenal consciousness)に関する説明は以下のような約定をとおしてなされることになる。すなわちその約定とは、「心的状態Mはそれが経験(恐らくは、何らかのアナログな内容をともなった経験)と見なされるためには因果的役割(causal role)および/または(and/or) ある種の明確な内容(content of a certain distinctive sort)をもたねばならず、また、Mが何らかの経験(あるいは、心的イメージや身体感覚、あるいは情動的な感情)である場合、それがしかるべき仕方高階思考のターゲットとされる場合にかぎって現象的に意識的なものとなる」(Carruthers [2011]: 18)といったものであるが、この約定における「因果的役割」とはその心的状態Mが高階思考を引き起こす原因となることを指している。因みに、この約定から、「ある心的状態が(それに関する高階思考を引き起こす)因果的役割および/または何らかの明確な内容をもたないとするならば、その心的状態は経験とは見なされない」というもうひとつの約定が帰結することになる。

以上の議論を踏まえカルーザースは、現実主義的高階思考理論に依拠するかたちで現象的に意識的な心的状態に関して以下のような定義的説明を与える。

現象的に意識的な心的状態(phenomenally conscious mental state)は、高階思考の対象となり、その思考を非推論的に引き起こす(おそらくは、アナログで非概念的な志向的内容(analog/non-conceptual intentional content)をともなった)ある種の状態である。(Carruthers [2011]: 18)

カルーザースによるこの定義的説明に依拠するならば、現実主義的高階思考理論に関する理解として以下の二種のもが想定可能となる。

- (1)ある心的状態はそれが意識的なものであることによって高階思考を非推論的に引き起こし、その高階思考の対象となる(【原因₁】ある心的状態が意識的である—【結果₁】その心的状態に関する高階思考が生起する【原因₂】—【結果₂】その心的状態が高階思考の対象となる)。
- (2)ある心的状態は高階思考を非推論的に引き起こすこと

によって意識的な状態となる(【原因】ある心的状態が高階思考を非推論的に引き起こす—【結果】その心的状態は意識的な状態となる)。

あらためて言うまでもなく、ここで問題となるのは、これら二種の理解のうちそのいずれがより妥当なものを見なされるかという点であるが、上に見たように「心的状態Mが何らかの経験(あるいは、心的イメージや身体感覚、あるいは情動的な感情)である場合、それがしかるべき仕方高階思考のターゲットとされる場合にかぎって現象的に意識的なものとなる」(Carruthers [2011]: 18、下線は松崎による)とするならば、(2)の理解がより妥当なものを見なされることになる。

しかしながら、意識的な心的状態の生起に関わる因果連関をより正確に捉えるならば、それは「【原因₁】ある心的状態—【結果₁】高階思考が非推論的に生起する—【原因₂】その高階思考がその心的状態をターゲットとする—【結果₂】その心的状態は意識的な状態となる」といった複合的な因果連関であることが明らかとなる。

以上の議論をまとめるならば、現実的高階思考理論の基本構制に関する定義的理解は、「ある心的状態は、それが非推論的に引き起こす高階思考のターゲットとされることで意識的な状態となる」といったものと解されることになる。

現実的高階思考理論の基本構制に関するこの定義的理解に関して若干の補足説明を付しておくならば以下のようになる。

- (1)この定義的理解を分析的に捉えるならば、ここでは「ある心的状態をターゲットとすることでその心的状態を意識的なものとする高階思考は非推論的に引き起こされたものでなければならない」という条件が課せられていることが明らかとなる。この条件は、「ある心的状態にそれをターゲットとする高階思考がともなったとしてもその心的状態自体は無意識的なものにとどまる」という高階思考理論に対する反証となりうる事例、たとえば、精神分析医による診断内容から(意識的に)推論することで(とくに不安を感じることなく)自分が無意識の不安を覚えていることを覚知するケースや、ある異性に対する自己の一連の発言や振舞いから(意識的に)推論することで(とくに恋慕の情に身を焦がすことなく)自分がその人物に対して無意識の恋愛感情を抱いていることに気づくといったケースを排除するために不可欠のものとなる(Rosenthal [2005]: 57, 183-4. See also Gennaro [2017]: 97-8, Carruthers [2011]: 18-9)。

因みに、ある心的状態に対する高階思考が(意識的な)推論をとおして得られたものである場合、上に挙げた二つの例からも明らかのように、それをとおして意識化(覚知)された自己の心的状態はそれに特有の「感じ(feel)」もしくはクオリアを欠くことになる。

(2)この定義的理解に関しては、「すべての心的状態は高階思考を生み出す(生み出しうる)のか、もしそうでないとするならば高階思考を生み出す(生み出しうる)心的状態と生み出さない(生み出しえない)心的状態との違いはどこにあるのか」という問いが提起されることになる。この問いに対しては、上に挙げた現象的意識に関する約定にあった「心的状態Mはそれが経験[...]と見なされるためには因果的役割(causal role)および/または(and/or)ある種の明確な内容(content of a certain distinctive sort)をもたねばならぬ」という一節を踏まえることで、「すべての心的状態が高階思考を生み出す(生み出しうる)わけではなく、その心的状態が他の心的状態と区別される明確な内容をもつ場合に限り、その心的状態はそれに対応する高階思考を生み出す(生み出しうる)」、逆に言うならば、「ある心的状態が他の心的状態と区別される明確な内容をもたないとするならば、その心的状態はそれに対応する高階思考を生み出さない(生み出しえない)」と応ずることができる³¹。

2) 傾性主義的高階思考理論

ついで本項では意識に関する傾性主義的高階思考理論を取り上げることにするが、この理論は主としてピーター・カルーザスによって提唱されたものであることから³²、ここでは彼の議論(Carruthers [2000], Carruthers [2004], Carruthers [2005], Carruthers [2011])をもとに傾性主義的高階思考理論について考察をおこなうことにしたい。

さて傾性主義的高階思考理論によれば、ある知覚的状态が意識的状态であるのは、それが高階思考にとって利用可能であることによる(Carruthers [2011]: 25, see also Carruthers [2000]: 227)。すなわち傾性主義的高階思考理論によるならば、私のもつある心的状態Mは、「私はMをもつ」という現勢化された(一般に無意識的な)思考(信念)を非推論的に引き起こすよう傾性づけられており(disposed)、そのことによって心的状態Mは意識的な心的状態となる(Carruthers [2011]: 25)。

この点を踏まえカルーザスは、傾性主義的高階思考理論の基本的主張として以下のものを呈示する。

現象的に意識的な心的状態は、(非推論的に)それ自体(ことによると記憶貯蔵庫に保存されたすべての内容)に関する高階思考を引き起こすために利用される(おそらくはアナログで非概念的な志向的内容を具え、特殊な目的のために短期的記憶貯蔵庫[short-term memory store]に保存された)ある種の状態である。(Carruthers [2011]: 25-6)

上に挙げた傾性主義的高階思考理論の基本的主張と同趣旨の内容はCarruthers [2000]にもみられるが(Carruthers [2000]: 228)、そこではその内容をより具体的に説明するために以下の図1に示す「機能図式(functional diagram)」(Carruthers [2000]: 228, Figure 8.1)が用いられている。

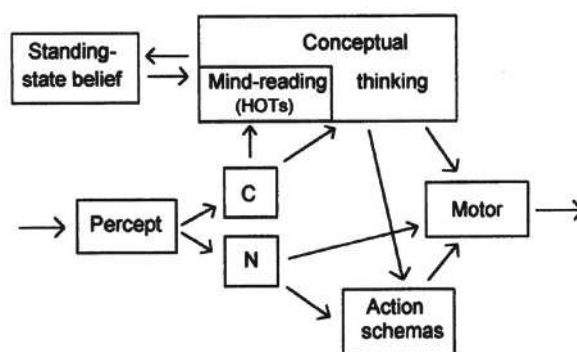


図1:傾性主義的高階思考理論に関する機能図式

そこで、この機能図式も参照しながら、Carruthers [2000]をもとにあらためて傾性主義的高階思考理論の基本的主張の要点を箇条書きに記すならば以下ようになる。

- ①(一階の)知覚をとおして何らかの知覚内容が得られる。
- ②その知覚内容が特殊な(意識的)短期的記憶貯蔵庫Cに送り込まれる。
- ③その貯蔵庫に保管された知覚内容は「心を読み取る能力(mind-reading faculty)」をとおしてそれに関する高階思考を生み出すために利用される。
- ④こうした利用可能性をもつ、別言するならば、高階思考を産出するよう傾性づけられていることによってその知覚内容は意識的な経験となる。

ここでとりわけ問題となるのは「心を読み取る能力」であ

るが、カルーザースはCarruthers [2000]においてこの能力を「心の理論(theory of mind)」³³⁾と等置したうえで、それについて以下のように述べる。

これ[心を読み取る能力]は、[意識的な短期記憶貯蔵庫である]C³⁴⁾に蓄えられたすべての内容に関して高階思考を生み出すことができる。とりわけ、心を読み取るシステムは「である／に見える」の区別(is-seems distinction)および／または(and/or)知覚者の主観的で、表象的な状態としての経験を理解するために必要とされる。(Carruthers [2000]: 241)

この一節から明らかなように、「心を読み取る能力」とは知覚経験の主体としての自己の心中に位置する意識的な短期記憶貯蔵庫に蓄えられた内容を読み取る能力に他ならず、まさにその意味でこの能力は知覚経験の主体としての自己の心を読み取るものであると言える。

一階の知覚内容が端的にそうした内容である(is)のに対し、意識的な短期記憶貯蔵庫に蓄えられたこの一階の知覚の内容が「心を読み取る能力」をとおして読み取られるとき、それは知覚経験の主体に対してそうしたものに見える(seem)ことになるのだが、このことを別な角度から捉えるならば、経験はたんにその対象そのものを表象するだけにとどまらず、経験主体がその対象を経験しているということ自体をも表象することを意味する。「心を読み取るシステムは「である／に見える」の区別および／または知覚者の主観的で、表象的な状態としての経験を理解するために必要とされる」というカルーザースの発言は、まさにこうした事態を踏まえたものであると考えられる。

ところでカルーザースは、傾性主義的高階思考理論を高階知覚理論の一種と見なしている(Carruthers [2004]: 115-6, 117)。そこで以下では、この点に関する彼の議論を検討することをとおして、なぜこのような理解が可能となるのかその論拠を明示することで、傾性主義的高階思考理論と高階知覚理論とがいかなる内的連関のもとに置かれるのかを解明し、それによって傾性主義的高階思考理論についてさらに理解を深めることにしたい。

その実態に即して捉え返すならば、傾性主義的高階思考理論は「二重内容理論(dual-content theory)」と名づけることも可能なのであるが、以下に挙げる一節においてカルーザースは、この「二重内容理論」の基本構制を示すな

かで、それが高階知覚理論として捉えられるものであることを指摘する。

この[「二重内容理論」]の説明によれば、われわれのもつ一階の知覚状態のうちのいくつかのものは、同時に、高階のアナログで非概念的な内容を獲得することになるが、それは消費者意味論(consumer semantics)の何らかのヴァージョン—目的意味論(teleosemantics)、もしくは機能的／概念的役割意味論(functional / conceptual role semantics)—のもつ真理と結び付けられることで、その一階の知覚状態が高階思考の能力に利用可能になるということによってである。(この[「二重内容理論」という]理論は「高階知覚(higher-order perception)」理論という呼称に値するが、それは、高階知覚を司る器官が要請されることはないにもかかわらず、この理論がわれわれの一階の知覚状態の存在と内容を表象する一連の高階のアナログな—もしくは「経験的な(experiential)」—状態を提案するとの理由による。(Carruthers [2004]: 118)

以下ではこの一節を丹念に読み解くことで、傾性主義的高階思考理論と高階知覚理論との関係を解明することに努めよう。

「二重内容理論」はその名が示すとおり、そこにおいては①一階の知覚的状态が具える内容と②この一階の知覚的状态が具える内容を表象する高階のアナログで非概念的な内容という二種の内容が問題となる。それぞれの内容についてさらに詳しく見るならば、前者は外界と内界(自己の身体)に関するアナログな表象としての経験が具える内容であるのに対し、後者は外界と内界(自己の身体)に関するアナログな表象としての経験が生じていることの表象、別言するならば、外界と内界(自己の身体)に関する表象(アスペクト)が知覚されていることの表象が具える内容であるということになる(see Carruthers [2000]: 242)。

このように一階の知覚的状态はそれを表象する高階のアナログで非概念的な内容をともなうのであるが、それを可能にするものが消費者意味論³⁵⁾を基盤とする、一階の知覚状態が傾性的に具える高階思考への利用可能性である。カルーザースによれば、消費者意味論に依拠することで高階思考の産出を可能にする高階思考消費者システムにおいてとりわけ問題となるのは「心を読み取る能力」(「心の

理論)」である。

上に述べたように、「心を読み取る能力」(「心の理論」)とは、知覚経験の主体としての自己の心中に位置する(意識的な)短期記憶貯蔵庫に蓄えられた内容を読み取る能力であると言えるが、この能力をとおして(意識的な)短期記憶貯蔵庫に蓄えられた内容は一階の知覚内容に必ず高階思考を産出するために利用されることになる。そして、この高階思考の産出に向けての利用可能性によって一階の知覚的状態はそれを表象する高階のアナログで非概念的な内容をともなうことになる。一階の知覚的内容にともないそれを表象する高階のアナログで非概念的な内容は、それがアナログで非概念的なものであることから、これを一種の高階知覚のもつ内容として捉えることも可能となる(高階思考の内容が非アナログ的で概念的であるのとは対照的に、高階知覚の内容は本来アナログで非概念的なものとしてある。See Carruthers [2011]: 13-5)。

この点に注目するならば、二重内容理論としての傾性主義的高階思考理論を高階知覚理論の一種として捉える可能性が拓けることになる。ここでとりわけ注意を要するのは、二重内容理論によれば、一階の知覚的状態にそれを表象する高階のアナログで非概念的な内容がともなうのは、あくまで一階の知覚状態を高階思考の産出に利用可能なものとする高階思考消費者システムのメカニズムによるのであって、それは一階の知覚的状態を内的に知覚する「内的感覚」といった独立した器官を必要としないという点である。この点で、この二重内容理論は本稿第3章第1節に見た高階知覚理論とは決定的に異なるものと言える。

一方で、上に見たように、一階の知覚状態を高階思考の産出に利用可能とする高階思考消費者システムをとおして一階の知覚内容にそれを表象する二階の知覚内容がともなうことになる。この点に鑑みるならば、一階の知覚状態が意識的な状態となるにあたってその大本に位置する第一次的原因をなすのはあくまで一階の知覚状態が傾性的に具える高階思考への利用可能性であるにせよ、この第一次的原因から帰結した、一階の知覚状態にそれを表象する二階の知覚がともなうという事態が一階の知覚状態が意識的な状態となるにあたってその直接的な原因をなしていることと捉えることも可能となる。そしてそのかぎりにおいて、少なくとも意識的知覚状態の成立機序に関しては、二重内容理論としての傾性主義的高階思考理論は高階知覚理論と基本的に同種の理解を示すものと見なされること

になる。

以上の点をまとめるならば、二重内容理論としての傾性主義的高階思考理論は、それを厳密に捉えるならば、高階知覚理論とは別個の独立した理論と言えるが、しかしその一方で、とくに両者の内的関連性に注目するならば、この傾性主義的高階思考理論を(少なくとも)高階知覚理論のひとつのヴァリエーションとして捉えることも可能であると結論づけられることになる³⁶。

(3) 補論1:内観の論理構造

「内観(introspection)」とは文字どおり自己の内面を見ること、より詳しく述べるならば、現在進行中の自己自身の心的状態や過程に関する一人称的視点からの観察を意味するが(Schwitzgebel [2014]: 1-3)、こうした内観について意識の高階表象理論は自己の立脚する理論的枠組みのもとにその論理構造の解明を試みている。そこでまずはこの点について確認しておくならば以下ようになる。

ある心的状態にともないそれをターゲットとする二階の表象はその心的状態を意識的な状態とするものであり、その意味で、それは一種の内観としてしてのあり方を示すことになるが、この二階の表象はそれ自体では意識化されないため、それはあくまで潜在的(potential)なものにとどまる。

一方、潜在的な内観としてのこの二階の表象にさらにそれをターゲットとする三階の表象がともなうときその二階の表象は意識化されることで顕在化することになるが、この顕在的内観(actual introspection)が勝義での内観であるということになる³⁷。

本稿第3章の冒頭に述べたように、高階表象理論はある心的状態を意識的なものとする高階表象の様態の違いに応じて、大きく高階知覚理論と高階思考理論とに二分されることから、以下では上に示した高階表象理論一般にもとづく内観に関する理解を踏まえたうえで、高階知覚理論と高階思考理論に依拠する内観の理解について個々に検討を加えることにしよう。

1) 高階知覚理論における内観の論理構造

高階知覚理論のもとに内観を捉えるならば、ある心的状態に対する二階の内的感覚(もしくは内的モニタリングシステム)それ自体がまだ意識化されていない潜在的な内観であり、それをターゲットとする三階の内的感覚をともなうことで意識化された二階の内的感覚(もしくは内的モニタリング

システム)が顕在的内観であるということになる。

高階知覚理論の理解では、高階の心的状態である内的感覚や内的モニタリングシステムは知覚に類したものであり、高階思考とは異なり概念的成分を含まないため、三階の内的感覚をともなった二階の内的感覚として意識化された顕在的内観は概念的思考としての命題ではなく、「非概念的・アナログ的」な直観にとどまることになる³⁸。ここでは、こうした「非概念的・アナログ的」な直観としての顕在的内観を「弱い意味での内観(introspection in the weak sense)」と名づけることにする(see Armstrong [1968]: 329)。

2) 高階思考理論における内観の論理構造

一方、高階思考理論のもとに内観を捉えるならば、ある心的状態に対する二階の思考それ自体がまだ意識化されていない潜在的な内観であり、それをターゲットとする三階の思考をともなうことで意識化された二階の思考が顕在的内観であるということになる(Rosenthal [2005]: 48-9, 110, 113)。

高階思考理論の理解では、高階思考は、内的感覚や内的モニタリングシステムのような知覚に類したのではなく、それ自体が概念的な思考、すなわちある種の概念的成分を含んだ認知的状態であるということになる。そのため、三階の思考をともなうことで意識化された二階の思考としての顕在的内観はそれ自体がひとつの概念的構成体である命題としてのあり方を示すことになり(see Rosenthal [2005]:120-1, 122)、そのかぎりにおいてその(顕在的)内観の内容は言語化可能なものとなる(Rosenthal [2005]:130)。

命題としてのあり方を示すこうした概念的思考としての顕在的内観をここでは、「弱い意味での内観」としてある「非概念的・アナログ的」な直観としての顕在的内観と対比するかたちで、「強い意味での内観(introspection in the strong sense)」と名づけることにする。

(4) 補論2:自己意識の問題

高階知覚理論であろうと高階思考理論(現実主義的高階思考理論および傾性主義的高階思考理論)であろうと、それが意識の高階表象理論であるかぎりにおいて、そうした高階表象理論の理解によるならば、ある心的状態M1はそれに対して一階上に位置する心的状態M2をともなうこと

によって意識的な心的状態となり、また心的状態M2はそれに対してさらに一階上に位置する心的状態M3をともなうことによって意識的な心的状態となるといったように、その階層をその都度ひとつずつ上げながら(少なくとも原理的には)こうした表象関係が際限なく繰り返されることになる。それぞれ階層を異にする心的状態からなるこの無限系列M1←M2←M3←…Mn←…を終結させるために要請されるものこそ自己意識(self consciousness)に他ならない。

この補論2の課題はこうした問題視角から自己意識について論ずることにあるが、ここでは以下に示す最小高階表象モデル【M01】をもとに自己意識について考察をおこなうことにする(なお【M01】における「SC \cup 」という記号表記は自己意識を表わす)。

【M01】M1←M2←SC \cup

【M01】にしたがうならば、心的状態M1は、それに対して一階上に位置する心的状態M2によって表象されることで意識化され、また心的状態M2は、それに対して一階上に位置する自己意識SC \cup によって表象されることで意識化されることになる。

自己意識はその名が示すとおり自己自身を表象するものであり、そのことによって自己意識はそれ自体が意識的な心的状態となるため、自己意識が意識化されるためにさらに高階知覚や高階思考といった自己意識とは別個の高階表象を必要としない(see Brook [2013]: 27)。別言するならば、自己意識にあっては自己を表象するとき同時に表象する自己を意識するのであって、自己を表象する自己をさらに表象する必要はないのである³⁹。

このように自己意識は、心的状態M2を表象することでそれを意識化する一方で、自己自身を再帰的に表象することでそれ自体が意識的な心的状態となるのであるが、自己意識がこうした対他・対自の両面にわたる二重の表象機能を具えるものであることから、この自己意識をもって階層を異にする心的状態の系列は閉じられることになる。

しかしながら自己意識はたんに自己自身を表象することによって自己を意識化するにとどまらず、M1とM2のいずれをも自己の心的状態に他ならぬものとして捉えることで、両者をひとつの経験に統合する。まさにその意味で、自己意識はカントの言う「超越論的統覚(die transzendente Apperzeption)」としてのあり方を示すものと見なされる(Kant [1976], see also Brook [2013], Smith [2017]: 43-4)。

以上【M01】をもとにとくに本稿の論脈において自己意識の要点を確認してきたのであるが、本節を締めくくるにあたり、自己意識はそれより一階下に位置する心的状態を表象する際に、そのターゲットとなる心的状態に対して高階知覚と高階思考のいずれとしてのあり方を示すのかという問題を取り上げ、この点について考察をおこなうことにしたい。

この問題に取り組むにあたっては、まずはその端緒として、思考一般と知覚一般（そこには感受も含まれる）においてその対象と主体がそれぞれいかなる関係にあるかを押さえておくことが有効な手がかりとなる。

まず思考に関して言うならば、思考においては一般に思考の対象と思考の主体とが截然と分かれたることになるため、自己意識に見られるように思考の対象が自己自身であるとき、主体Sは思考の対象としての自己S1とそれを思考する主体としての自己S2とに分裂し、自己自身（すなわち思考する主体としての自己S2をも包摂する自己）をそのままのかたちでまると捉えることは原理的に不可能となる。それに対して、感受をもその一様態として包摂する知覚一般においては、知覚（感受）の対象としての自己S1と知覚（感受）の主体としての自己S2とが、思考の場合とは異なり、截然と分かれたことはなく、ここでは知覚（感受）する主体S2が知覚（感受）される主体S1であるとともに、知覚（感受）される主体S1が知覚（感受）する主体S2である（ $S_1=S_2$ ）という、メルロ＝ポンティの言う「交叉配列（chiasme）」という特異な現象の生起が認められることになる⁴⁰。したがって知覚においては、自己意識に見られるようにその知覚（感受）の対象が自己自身である場合であっても、主体Sは知覚（感受）の対象としての自己S1とそれを知覚（感受）する主体としての自己S2とに分裂することなく、両者がいわば一種の交叉的融合状態に置かれることになるため、ここでは自己自身（すなわち知覚〔感受〕する自己S2をも包摂する自己）をそのままのかたちでまると捉えることが可能となる。

以上の点を勘案するならば、自己を表象する自己意識は高階思考としてではなくむしろ高階知覚として捉えるのが妥当であると結論づけられることになる。因みに、自己意識が自己に対して高階知覚としてのあり方を示すものであるとするならば、上に述べたように自己意識にあっては表象される自己がすなわち表象する自己であることから、自己意識（より精確に言うならば自己意識において表象される自己）が一階下に位置する心的状態を表象する際にも自己意識

（自己意識において表象される自己）は高階知覚としてのあり方を示すものと考えられることになる。

4. 意識の高階表象理論にもとづく知覚的クオリアと美的クオリアに関する理解

以上意識の高階表象理論について、その中核に位置づけられる意識の高階知覚理論と意識の高階思考理論、さらには後者の下位種にあたる現実主義高階思考理論および傾性主義高階思考理論それぞれの要点を押さえることで、その基本構制の確認をおこなうとともに、高階表象理論との関係において内観の論理構造と自己意識の問題について考察をおこなってきたのであるが、本章では、前章までの議論を踏まえ、そこで得られた各理論に関する知見を適宜参照しながら、意識の高階表象理論をもとに知覚的クオリアと美的クオリアの成立機序の解明にあたるとともに、そこでの議論に依拠することで知覚的クオリアと美的クオリアとの関係について考察をおこなうことにしたい。

(1) 知覚的クオリアの成立機序に関する理解

本節ではまず意識の高階表象理論をもとに知覚的クオリアの成立機序について考察をおこなうことにする。

経験主体Sがある対象O（たとえば「トマトの赤さ」）を知覚するとき（一階の知覚=FOP）、その主体Sはある心的状態M1に置かれることになるが、この心的状態M1には必然的に潜在的知覚的クオリア[pQ]（潜在的赤のクオリア⁴¹）がともなうものと考えられる（【M02】参照）。

【M02】FOP: $S(\text{perceive} \rightarrow O) = M1 \rightarrow [pQ]$

この潜在的知覚的クオリア [pQ]に、その感受を作用内実とする二階の知覚HOP1(M2)⁴²がともなうとき、潜在的知覚的クオリア[pQ]は意識化され、それによって顕在的知覚的クオリア、すなわち勝義での知覚的クオリアpQとして現勢化することになる（【M03】参照）。

【M03】HOP1(M2)① → [pQ]② ⇒ pQ

この潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の知覚HOP1(M2)は潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の思考HOT1(M2)を引き起こす傾性(disposition)を具えるが、それが現勢化されるとき潜在的知覚的クオリア

[pQ]の感受をその志向内容とする二階の思考HOT₁(M₂)が生起することになる⁴³(【M04】参照)。

【M04】HOP₁(M₂)disp.⇒HOT₁(M₂)

この点について傾性概念に関する定義的理解をもとにさらに敷衍するならば以下ようになる。

傾性とは対象のもつ潜在的・可能的な特性を意味する。たとえば「食塩(=塩化ナトリウム NaCl)は白い」と言われるときの「白い(white)」という語が食塩のもつ顕在的・現実的特性を表わしているのに対し、「食塩は水溶性をもつ」と言われるときの「水溶性(solubility)」という語は、食塩のもつ潜在的・可能的特性を表わしている。あるものがある顕在的・現実的特性をもつということは、それが現にある特定の状態にあるということの意味するが、一方あるものがある傾性をもつということは、それがある特定の(諸)条件のもとに置かれたとするならばある特定の状態になる(傾向をもつ)ということの意味する。したがって、傾性は反事実条件文(counterfactual conditional)をもとに分析が可能となる。たとえば「食塩は水溶性をもつ」という命題は「ある標準的な諸条件のもとで食塩を水に浸すならば、食塩は水に溶ける」という反事実条件文と等値であると見なされるのである(Choi and Fara [2014]: 5-6)。以上の点を踏まえて傾性概念一般について捉えるならば、傾性とは対象が潜在的・可能的にもつ、ある条件(もしくは条件群)のもとである特定の事態を引き起こす(傾向的)特性であるということになる⁴⁴。

傾性概念一般に関する上記の定義的理解に照らし合わせることで、潜在的知覚的クオリア[pQ]をターゲットとする二階の知覚HOP₁(M₂)が具える、潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こす傾性についてあらためて見てみるならば、ここで第一に問題となるのは、傾性一般が反事実的条件文によって示されるものであるとするならば、二階の知覚HOP₁(M₂)の具える傾性はいかなる反事実的条件文によって示されるのかという点である。

この問いに対しては、二階の知覚HOP₁(M₂)の具える傾性を示す反事実的条件文として、たとえば「潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の知覚HOP₁(M₂)の感受内容を言語化することを意図するならば、二階の知覚HOP₁(M₂)は潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こすことになる」といったものを挙げることで応ずることができる。因みに、そうした意図を抱

くことになる典型的なケースとしては、一階の知覚の感受内容を他者から問われるケースが挙げられる。

上に見たように、傾性とは対象が潜在的・可能的にもつ、ある条件(もしくは条件群)のもとである特定の事態を引き起こす(傾向的)特性であるのだが、だとすれば仮にそうした条件(条件群)が充たされないとするならば、傾性は潜在的・可能的な特性にとどまり現勢化することはないということになる。この点について二階の知覚HOP₁(M₂)の具える傾性に即して述べるならば、二階の知覚HOP₁(M₂)の具える二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こす傾性は、二階の知覚HOP₁(M₂)の感受内容を言語化することがとくに意図されないとするならば、現勢化されない、すなわち二階の思考HOT₁(M₂)が生起することはないということになる。たとえば知覚能力は具えながらも言語能力を欠いた人間以外の動物たちやいまだ言語をもたない嬰兒は、当然ながらHOP₁(M₂)の感受内容を言語化することを意図することはない(あるいは事態をより正しく伝えるならば、意図しようがない)ため、彼らにあっては二階の知覚HOP₁(M₂)の具える二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こす傾性は現勢化されず、したがって二階の思考HOT₁(M₂)が生起することはないのである。

さて上述のように、二階の知覚HOP₁(M₂)が具える、潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こす傾性が現勢化されるとき、潜在的知覚的クオリア[pQ]の感受をその志向内容とする二階の思考HOT₁(M₂)が生起することになる。本稿第3章第2節第1項に示した現実主義の高階思考理論の理解にしたがうならば、潜在的知覚的クオリア[pQ]は、それをターゲットとする二階の思考HOT₁(M₂)がともなうことによって、顕在的知覚的クオリアpQとして現勢化(意識化)されることになる。しかしそのとき、潜在的知覚的クオリア[pQ]の顕在的知覚的クオリアpQとして現勢化(意識化)は、直接的には二階の知覚HOP₁(M₂)によって、また間接的には二階の思考HOT₁(M₂)によって二重に実現されることになるが、それでは、二階の知覚HOP₁(M₂)による潜在的知覚的クオリア[pQ]の現勢化(意識化)と二階の思考HOT₁(M₂)によるそれとはいかなる関係にあるのだろうか。

この問題について考えるにあたっては、二階の知覚HOP₁(M₂)と二階の思考HOT₁(M₂)のそれぞれが潜在的知覚的クオリア[pQ]をいかなる仕方表象するか、その表象様態の違いに注目する必要がある。

二階の知覚HOP₁(M₂)の表象様態について言うならば、潜在的知覚的クオリア [pQ]を感受する二階の知覚HOP₁(M₂)の感受内容はその対象としての潜在的知覚的クオリア [pQ]と同様、アナログで非概念的なものであることから、二階の知覚HOP₁(M₂)は潜在的知覚的クオリア [pQ]を余すことなく十全なかたちで表象するものと考えられる。それに対して、等しく潜在的知覚的クオリア [pQ]をターゲットとするとはいえ、思考一般がそうであるように、二階の思考HOT₁(M₂)もまた本来非アナログで概念的なものであることから、二階の思考HOT₁(M₂)が潜在的知覚的クオリア [pQ]を表象する際、潜在的知覚的クオリア [pQ]はアナログから非アナログへの概念的変換を被ることになる。そのため二階の思考HOT₁(M₂)の表象内容は、概念的変換をとおして獲得された概念的内容となり、その意味で二階の思考HOT₁(M₂)による潜在的知覚的クオリア [pQ]の表象は不完全なものにとどまることになる。

こうした事態を反映して、二階の知覚HOP₁(M₂)による潜在的知覚的クオリア [pQ]の現勢化(意識化)が十全なものであるのに対し、二階の思考HOT₁(M₂)によるそれは不完全なものにとどまることになる。そのため、潜在的知覚的クオリア [pQ]の現勢化(意識化)という点に関しては、二階の知覚HOP₁(M₂)による現勢化(意識化)が第一義的なものと位置づけられ、二階の思考HOT₁(M₂)によるそれはあくまで二階の知覚HOP₁(M₂)による意識化に準ずる副次的なものにとどまることになる。とはいえ、二階の知覚HOP₁(M₂)によるそれとは異なり、二階の思考HOT₁(M₂)による潜在的知覚的クオリア [pQ]の現勢化(意識化)は、その表象内容の言語化への道を拓くものであり、その点で二階の知覚HOP₁(M₂)による意識化を補完するものとして捉えることも可能となる。

上に挙げた「表象内容の言語化」の問題は本稿第3章第3節で取り上げた内観の論理構造に直接関わるものであることから、以下ではとくに高階思考(HOT)系列に焦点を当ててそこにおける内観の論理構造について考察をおこなうことにしたい。

上に見たように、潜在的知覚的クオリア [pQ]にそれをターゲットとする二階の思考HOT₁(M₂)がともなうことにより、潜在的知覚的クオリア [pQ]は顕在的知覚的クオリア pQとして現勢化(意識化)されることになるのだが、この二階の思考HOT₁(M₂) にさらに一階上の思考、したがって一階の心的状態M₁の具える潜在的クオリア [pQ]から

見るならば、それに対して三階に位置する思考HOT₂(M₃)がともなうとき、二階の思考HOT₁(M₂)は意識化されることになる(【M05】参照)。

【M05】HOT₂(M₃)^① ← unconsci.HOT₁(M₂)^② ⇒ consci.HOT₁(M₂)

一階の心的状態M₁が具える知覚的クオリア pQに関するこうした二重化された高階思考関係こそまさに知覚的クオリア pQに関する内観の論理構造に他ならないと言えるが、そのときその内観の内実は知覚的クオリア pQに関する意識化された二階の思考HOT₁(M₂)であるということになる(因みに、本稿第3章第3節に示した理解にしたがえば、ここで問題となる内観は「強い意味での顕在的内観」であると言える。【M06】参照)。

【M06】内観の論理構造:(FOP[M₁] →) pQ ←

[HOT₁(M₂)] ← HOT₂(M₃) (四角囲いた項が内観の内実にあたる)

知覚的クオリア pQに関する内観の内実をなす二階の思考HOT₁(M₂)は「私はある知覚的クオリア pQをもっている(感受している)」という一般的定式のもとに捉えられる命題内容を有するものと考えられる。たとえばトマトのもつ「赤さ」の知覚に即してこの定式を捉え返すならば、それは「私は赤のクオリアをもっている(感受している)」、あるいはより直截に表現すれば、「私は赤を感覚している(感じている)」といったものとなる(cf. Rosenthal [2005]: 122)。

上に挙げた「強い意味での顕在的内観」に典型的に見られる、一階の心的状態M₁の具える潜在的知覚的クオリア [pQ]を起点とする高階思考HOTの連鎖は、二階の思考HOT₁(M₂)にさらに三階の思考HOT₂(M₃)がともなうといったように、その階層をその都度ひとつずつ上げながら少なくとも原理的には無限に繰り返されることになる(ただし実際には、多く見積もっても三階の思考HOT₂(M₃)から四階の思考HOT₃(M₄)あたりが限界ということになる⁴⁵⁾。

本稿第3章第4節に指摘したように、こうした高階思考HOTの無限系列を断ち切ることでそれを終結させるものが自己意識に他ならない。すなわち高階思考HOTの系列は最終的に高階知覚HOP_nとしての自己意識SC_Uによって終結を見ることになるのである⁴⁶⁾【M07】参照)。

【M07】(FOP[M₁] →) pQ ← HOT₁(M₂) ← HOT₂(M₃) ← HOT₃(M₄) ← … HOT_{n-1}(M_n) ← SC(HOP_n)_U

因みに言えば、自己意識によって高階思考HOTの系列が閉じられるのは、本稿第3章第4節に見たように、自己意

識は自己自身を表象することによってそれ自体が意識的心的状態となるため、自己意識が意識化されるためにさらに高階知覚HOPや高階思考HOTといった自己意識とは別個の高階表象を必要としないことによる。

(2) 美的クオリアの成立機序に関する理解

ついで本節では意識の高階表象理論をもとに美的クオリアの成立機序について考察をおこなうことにする。

感受をもその一様態として包摂する知覚一般は必然的に何らかのクオリアを具えることから、潜在的知覚的クオリア[pQ]をターゲットとする二階の知覚HOP₁(M₂)もまた、それが広義での知覚に数えられるものであるかぎりにおいて、クオリアを具えることになるが⁴⁷、そうした二階の知覚HOP₁(M₂)の具えるクオリアのうちある種のものが潜在的美的クオリア[aQ₁]であると考えられる。

二階の知覚HOP₁(M₂)の具えるクオリアがとくに潜在的美的クオリア[aQ]として生起するにあたっては、二階の知覚HOP₁(M₂)が、何らかの目的連関のもとに設定される実践的関心や何らかの外的コンテクストのもとに設定される外的連関⁴⁸の一切を絶ち、一種の静観的態度(contemplative attitude)をもって一階の知覚FOPの具える潜在的知覚的クオリア[pQ]それ自体に向けられることが必須の要件となる^{49, 50}。

ここではこうした特異な在り方を示す高階知覚一般をとくに「美的高階知覚(aesthetic higher-order perception)」と名づけ、それを「aHOP」によって記号表記することにする(【M08】参照)。

【M08】 $pQ \leftarrow aHOP_1(M_2) - [aQ_1]$

本稿第3章第1節第2項[2]においては二階の知覚が具える潜在的クオリア一般に関して論じたのであるが(14頁)、そこでの議論との関連において捉えるならば、二階の美的知覚aHOP₁(M₂)が具える潜在的美的クオリア[aQ₁]は、対象に対する一階の知覚FOPの具える顕在的知覚的クオリアpQをその経験主体としての自己Sがどのように感受しているか、あるいは別言するならば、その顕在的知覚的クオリアpQが経験主体としての自己Sにとってどのようなものとしてあるか、すなわち経験主体としての自己Sと一階の知覚FOPの具える顕在的知覚的クオリアpQとの間に成立するある特定の関係様態Rを潜在的な仕方では表象するものと考えられる(【M09】参照)。

【M09】 $aHOP_1(M_2) - [aQ_1] \text{ potentially.rep.} \rightarrow R(S, pQ)$

この点について具体例を挙げて説明するならば、対象としてのトマトに対する一階の知覚FOPの具える「赤さ」という潜在的知覚的クオリア[pQ]にそれをターゲットとする二階の美的知覚aHOP₁(M₂)がともなうことでそれが顕在化(意識化)されるとき、その二階の美的知覚aHOP₁(M₂)が具える、たとえば「あざやかさ」、「みずみずしさ」、「けばけばしさ」、「どぎつさ」といった潜在的美的クオリア[aQ₁]は、「赤さ」という顕在的知覚的クオリアpQを経験主体としての自己Sがどのように感受しているか、あるいは「赤さ」という顕在的知覚的クオリアpQが経験主体としての自己Sにとってどのようなものとしてあるか、すなわち経験主体としての自己Sと一階の知覚FOPの具える「赤さ」という顕在的知覚的クオリアpQとの間に成立するある特定の関係様態Rを潜在的な仕方では表象する、ということになる。

この潜在的美的クオリア[aQ₁]に、その感受を作用内実とする三階の知覚HOP₂(M₃)がともなうとき、潜在的美的クオリア[aQ₁]は意識化され、それによって顕在的美的クオリア、すなわち勝義での美的クオリアaQ₁として現勢化することになる(【M10】参照)。

【M10】 $HOP_2(M_3) \textcircled{1} \rightarrow [aQ_1] \textcircled{2} \Rightarrow aQ_1$

上に見たように、二階の美的知覚aHOP₁(M₂)が具える潜在的美的クオリア[aQ₁]は、経験主体としての自己Sと一階の知覚の具える顕在的知覚的クオリアpQとの間に成立するある特定の関係様態Rを潜在的な仕方では表象するものと考えられる。一方、この潜在的美的クオリア[aQ₁]に、それをターゲットとする三階の知覚HOP₂(M₃)がともなうことで、潜在的美的クオリア[aQ₁]が顕在的美的クオリアaQ₁として現勢化(意識化)されるとき、顕在的美的クオリアaQ₁は自己Sと一階の知覚FOPの具える顕在的知覚的クオリアpQとの間に成立するある特定の関係様態Rを顕在的・現象的な仕方では表象することになる(【M11】参照)。

【M11】 $aQ_1 \text{ rep.} \rightarrow R(S, pQ)$

三階の知覚HOP₂(M₃)が知覚の一種に数えられるものであるかぎりにおいて、この三階の知覚HOP₂(M₃)もまた(必然的に)潜在的クオリアを具えることになるが、この三階の知覚HOP₂(M₃)がとくに三階の美的知覚aHOP₂(M₃)であるとき、それは(必然的に)潜在的美的クオリア[aQ₂]を具えることになる(【M12】参照)。

【M12】 $aHOP_2(M_3) - [aQ_2]$

そしてその潜在的美的クオリア[aQ₂]にそれをターゲット

とする四階の知覚HOP₃(M₄)がともなうとき、潜在的美的クオリア[aQ₂]は顕在的美的クオリアaQ₂として現勢化(意識化)されることになる(【M13】参照)。

【M13】HOP₃(M₄)^①→[aQ₂]^②⇒aQ₂

顕在的美的クオリアaQ₁が経験主体としての自己Sと一階の知覚FOPの具える顕在的知覚的クオリアpQとの間に成立するある特定の関係様態Rを顕在的・現象的な仕方で表象すると類比的に、顕在的美的クオリアaQ₂は経験主体としての自己Sと二階の美的知覚aHOP₁(M₂)の具える顕在的美的クオリアaQ₁との間に成立するある特定の関係様態Rを顕在的・現象的な仕方で表象することになる(【M14】参照)。

【M14】aQ₂rep.→R(S, aQ₁)

上に見た、美的高階知覚aHOPの連鎖過程は、ある階層における美的知覚aHOP_n(M_{n+1})の具える潜在的美的クオリア[aQ_n]にそれをターゲットとする高階の美的知覚aHOP_{n+1}(M_{n+2})がともなうことで、その潜在的美的クオリア[aQ_n]が顕在的美的クオリアaQ_nとして現勢化(意識化)されるといった仕方で、以下(少なくとも原理的には無限に)繰り返されることになる(ただし実際には、多く見積もっても四階の美的知覚aHOP₃(M₄)から五階の美的知覚aHOP₄(M₅)あたりが限界ということになる)。

美的高階知覚aHOPの連鎖過程をとおしてその各階層において生起する顕在的美的クオリアaQ₂, aQ₃, aQ₄……は、それぞれ別個の美的クオリアとして個々バラバラに定立されるのではなく、その階層秩序にしたがってaQ₁のもとに統合され、このaQ₁の内実を満たしてゆくことになる(したがって最終的に美的クオリアとして定立されるのは唯一aQ₁のみであるということになる)。このことを比喩的に表現するならば、aQ₂, aQ₃, aQ₄……はaQ₁を基音とする倍音のように順に現われ、全体としてひとつの音色を醸し出すことになると言うこともできよう⁵¹。因みに、こうした顕在的美的クオリアの統合は本稿第3章第4節に指摘した自己意識のもつ超越論的統覚作用によって実現される。

一方で、本稿第4章第1節で指摘したように、潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の知覚HOP₁(M₂)が潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の思考HOT₁(M₂)を引き起こす傾性を持つと同様、潜在的美的クオリア[aQ₁]に対する三階の知覚HOP₂(M₃)は潜在的美的クオリア[aQ₁]に対する二階の思考HOT₁(M₃)を引き起こす傾性を持つことになるが、それが現勢化され

るとき、潜在的美的クオリア[aQ₁]を感受しているという命題をその内容とする二階の思考HOT₁(M₃)が現れることになる(【M15】参照)。

【M15】HOP₂(M₃)disp.⇒HOT₁(M₃)

しかしそのとき、潜在的美的クオリア[aQ₁]の顕在的知覚的クオリアaQ₁としての現勢化(意識化)は、潜在的知覚的クオリア[pQ]の顕在的知覚的クオリアpQとして現勢化(意識化)と同様、直接的には三階の知覚HOP₂(M₃)によって、また間接的には二階の思考HOT₁(M₃)によって二重に実現されることになる。潜在的美的クオリア[aQ₁]に関するこの二種の現勢化(意識化)の関係について述べるならば、潜在的知覚的クオリア[pQ]の現勢化(意識化)の場合と同様、三階の知覚HOP₂(M₃)による現勢化(意識化)が第一義的なものと位置づけられるのに対し、二階の思考HOT₁(M₃)によるそれはあくまでHOP₁(M₂)による現勢化(意識化)に準ずる副次的なものにとどまることになる。

さて、この二階の思考HOT₁(M₃)にさらに一階上の思考、したがって心的状態M₂がともなう潜在的美的クオリア[aQ₁]から見るならば、それに対して三階に位置する思考HOT₂(M₄)がともなうとき、二階の思考HOT₁(M₃)は現勢化(意識化)されることになる(【M16】参照)。

【M16】HOT₂(M₄)^①→unconsci.HOT₁(M₃)^②
⇒consci.HOT₁(M₃)

二階の心的状態M₂が具える美的クオリアaQ₁に対するこうした二重化された高階思考関係こそまさに美的クオリアaQ₁に対する内観の論理構造に他ならないと言えるが、そのときその内観の内実は美的クオリアaQ₁に関する意識化された二階の思考HOT₁(M₃)であるということになる(あらためて言うまでもなく、ここでの内観は「強い意味での顕在的内観」である。【M17】参照)。

【M17】内観の論理構造:(aHOP₁[M₂]→)aQ₁←

[HOT₁(M₃)]←HOT₂(M₄)(四角囲いた項が内観の内実にあたる)

美的クオリアaQ₁に関する内観の内実をなすHOT₁(M₃)は「私はある美的クオリアaQ₁をもっている(感受している)」という一般的定式のもとに捉えられる命題内容を有するものと考えられる。たとえばトマトのもつ「あざやかさ」の感受に即してこの定式を捉え返すならば、それは「私はあざやかさをもっている(感受している)」、あるいはより直截に表現すれば、「私はあざやかさを感じている」といったものとなる(cf. Rosenthal [2005]: 122)⁵²。

上に挙げた「強い意味での顕在的内観」に典型的に見られる、 $aHOP_1[M_2]$ の具える潜在的美的クオリア $[aQ_1]$ を起点とするHOTの連鎖は、 $HOT_2(M_4)$ にさらに $HOT_3(M_5)$ がともなうといったように、その階層をその都度ひとつずつ上げながら少なくとも原理的には無限に繰り返されることになる(ただし実際には、多く見積もっても $HOT_3(M_5)$ から $HOT_4(M_6)$ あたりが限界ということになる)。

最終的にこの過程は HOP_n としての自己意識SC \cup によって終結を見ることになる⁵³(【M18】参照)。

【M18】 $(aHOP_1[M_2] \leftarrow aQ_1 \leftarrow HOT_1(M_3) \leftarrow HOT_2(M_4) \leftarrow HOT_3(M_5) \leftarrow \dots \leftarrow HOT_{n-1}(M_n) \leftarrow SC(HOP_n) \cup$

(3) 高階表象理論モデルにもとづく知覚的クオリアと美的クオリアとの関係に関する考察

本章第1節と第2節では意識の高階表象理論に依拠することで知覚的クオリアと美的クオリアの成立機序の解明に努めてきたのであるが、本節ではそこで得られた知見をもとにあらためて知覚的クオリアと美的クオリアとの関係について考察をおこなうことにしたい。

知覚的クオリアと美的クオリアとの関係について考察するにあたって、両クオリアの成立モデルのなかからとくに重要と見なされる箇所を析出し、それらをもとにあらたにモデル化をおこなうならば以下の【M20】が得られる。

【M20】 $FOP(M_1) \leftarrow pQ \leftarrow aHOP_1(M_2) \leftarrow aQ \leftarrow HOP_2(M_3)$

【M20】が示すように、一階の知覚FOPが必然的に具える潜在的知覚的クオリア $[pQ]$ は、それをターゲットとする二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ をともなうことで顕在化(意識化)され(ただし潜在的知覚的クオリア $[pQ]$ の顕在化[意識化]は、二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ によってのみならず、 $aHOP_1(M_2)$ がその一種をなすものとしてそのもとに包摂される二階の知覚一般 $HOP_1(M_2)$ によっても実現される)、それによって勝義での知覚的クオリア pQ として現勢化することになる。その一方で、この二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ が必然的に具える潜在的美的クオリア $[aQ]$ は、それをターゲットとする三階の知覚 $HOP_2(M_3)$ をともなうことで顕在化(意識化)され、それによって勝義での美的クオリア aQ として現勢化することになる。

以上のことから明らかなように、知覚的クオリア pQ の成立にとって二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ の存在はその十分条件をなす。他方で二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ は必然的に潜在的美的クオリア $[aQ]$ を具えることから、二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ を介した間接的なものとはいえ、潜在的美的クオリア $[aQ]$ の存在もまた知覚的クオリア pQ の成立にあたってその十分条件をなすものと見なされる。またこうした事態を逆に捉えるならば、知覚的クオリア pQ の成立は潜在的美的クオリア $[aQ]$ が存在するにあたってその必要条件をなすと言える。

この点をさらに敷衍してみるならば、潜在的美的クオリア $[aQ]$ が存在するとすれば必然的に知覚的クオリア pQ が存在することになるが、知覚的クオリア pQ が存在するからといって必ずしも潜在的美的クオリア $[aQ]$ が存在することにはならず、他方で、知覚的クオリア pQ が存在しなければ潜在的美的クオリア $[aQ]$ は存在しえない、ということになる。これこそまさに知覚的クオリア pQ と潜在的美的クオリア $[aQ]$ との間の関係に他ならない⁵⁴。

問題は美的クオリア aQ である。言うまでもなく美的クオリア aQ の成立はひとえに潜在的美的クオリア $[aQ]$ に三階の知覚 $HOP_2(M_3)$ がともなうか否かにかかっている。すなわち、潜在的美的クオリア $[aQ]$ に三階の知覚 $HOP_2(M_3)$ がともなうとするならば、知覚的クオリア pQ と美的クオリア aQ の両者がともに成立するのに対し、潜在的美的クオリア $[aQ]$ に三階の知覚 $HOP_2(M_3)$ をともなわないとするならば、美的クオリア aQ は成立せず知覚的クオリア pQ のみが成立するにとどまることになるのである。

この点を本稿本章第2節における美的高階知覚 $aHOP$ をめぐる議論と総合するならば、美的クオリア aQ に関する以下のような成立条件が得られることになる。

【美的クオリアの成立条件】

①潜在的知覚的クオリア $[pQ]$ をターゲットとしそれにとともなう二階の知覚が二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ であり、

かつ

②二階の美的知覚 $aHOP_1(M_2)$ の具える潜在的美的クオリア $[aQ]$ にそれをターゲットとする三階の知覚 $HOP_2(M_3)$ がともなう。

この顕在的美的クオリア aQ の成立条件から逆に、以下に示すその不成立条件が導出されることになる。

【美的クオリアの不成立条件】

①潜在的知覚的クオリア $[pQ]$ にそれをターゲットとする二

階の知覚がともなったとしても、それが二階の美的知覚 aHOP₁(M₂)ではないか、

または

②潜在的美的クオリア[pQ] をターゲットとしそれにとまなう二階の知覚が二階の美的知覚aHOP₁(M₂)であったとしても、その二階の美的知覚aHOP₁(M₂)の具える潜在的美的クオリア[aQ] にそれをターゲットとする三階の知覚HOP₂(M₃)がともなわない。

美的クオリアaQに関するこの不成立条件は、取りも直さず、知覚的クオリアは感受しながらも美的クオリアを感受しないという事態がなぜ生ずるのかという問いに対する直接的な回答となる。

なお最後に一言付言しておくならば、両クオリアに関する上記のモデルにしたがうならば、知覚的クオリアに対して二階の関係に立つのはあくまでaHOP₁(M₂)であって(少なくとも直接的には)美的クオリアではないことから、美的クオリアは知覚的クオリアに対して(少なくとも直接的には)「クオリアのクオリア」としてあるのではないということになる。この点はとくに銘記しておく必要がある⁵⁵。

5. 結

以上本稿においては、意識の高階表象理論に依拠して知覚的クオリアと美的クオリアについて考察をおこなうことで、両クオリアの成立機序を解明するとともに、それとおして両クオリアの関係を明確化することを試みたのであるが、本稿で取り上げた高階知覚理論と高階思考理論(現実主義的高階思考理論および傾性主義的高階思考理論)は高階表象理論におけるいわば標準的理論に位置づけられるものと言える。

高階表象理論にはこれらの標準的理論とは別に、そこから派生した自己表象的高階理論(self-representational higher-order theories)⁵⁶と総称される各種理論が存在する。そうした自己表象的高階理論を代表するものとしては、ジェナーロの広域内具性説(wide intrinsicality view=WIV, Gennaro [2012])、ヴァン・グーリックの高階グローバル状態(higher-order global states=HOGS)モデル(van Gulick [2000], van Gulick [2004])、クリーゲルの意識の自己表象理論(self-representational theory

of consciousness, see Kriegel [2009])が挙げられる⁵⁷。

自己表象的高階理論に包摂されるこれらの理論に共通する特徴としては、標準理論とは異なり、一階の心的状態と高階の心的状態とを別個の状態として截然と分けることなく、両者を意識的心的状態に内在しそれを構成する二つの部分として統合的に捉える点にある。

われわれに課された今後の課題は、自己表象的高階理論に包摂されるこれらの理論に依拠するとしたならば、知覚的クオリアと美的クオリアの成立機序、および両クオリアの関係に関していかなる理解が得られることになるかを個々に検証することで、知覚的クオリアと美的クオリアを考察するにあたってそのいずれがもっとも見込みのある理論と目されるかを明らかにする点にある。自己表象的高階理論に包摂されるこれらの理論は、それぞれの立場から標準的理論が蔵する種々の理論的問題の克服を目指してあらたに構想されたものと言えることから、先の課題を遂行するなかでもっとも見込みがあると見なされる理論が選定されたとするならば、その理論に依拠することで、標準的理論が蔵する諸問題を回避するかたちで高階表象理論の大枠のもとに知覚的クオリアと美的クオリアに関して考察をおこなう道が拓かれるものと期待される。

註

- クオリアに関してはさまざまな理解が示されているが、本稿では、それらのうち基本的かつ標準的な理解、別言するならば、最大公約数的な理解と見なされる、クオリアを内観(introspection)をとおして接近可能な(accessible)、経験のもつ現象的性格(phenomenal character)をかたちづくる性質として捉える理解にしたがうことにする。因みに、経験のもつ現象的性格とは、ある経験をするのが主観的に見て(すなわち、その経験主観にとって)どのようなことか(what it is like subjectively to undergo the experience)を意味する。なおクオリアに関する他の主要な理解については松崎 [2019]: 3-4を参照されたい。
- ジェナーロもまたクオリアに関して同様の理解を示している。Gennaro [2017]: 8.
- 「すべてのクオリアは意識的である」という命題の反対対当にあたる「すべてのクオリアは無意識的である」という命題はクオリアしてわれわれの抱く強固な直観に真っ向から対立するものであり、これをひとつの主張として維持することはさきわめて困難であると言える。したがって、クオリアに関する直観的理解にあえて異を唱え、「すべてのクオリアは意識的である」という命題を否定するとは実際上、それに矛盾対当する「あるクオリアは無意識的である」という命題を反定立することを意味すると考えられる。
- クオリアに関してこのような理解を示す論者として他にチャーマーズが挙げられる。Chalmers [1996]:4, see also Gennaro [2017]: 8.
- ここで問題となっているクオリアは本稿第2章に言う「顕在的クオリア」もしくは「勝義でのクオリア」であって、「潜在的クオリア」ではない点は注意を要する。
- こうした扱いは、知覚的特性と美的特性に関するアラン・H・ゴールドマンの理解から示唆を受けたものである。ゴールドマンは『美学必携』(2009)のために寄稿した項目「美的特性」の冒頭で、美的特性をその類型にしたがって大きく八つに分類し、それぞれの類型に配される美的特性のリストを掲げるのであるが、そのなかの一類型「二階の知覚的特性(second-order perceptual properties)」に含まれる美的特性の例として彼は「(色や音について言われる)あざやかであること(being vivid)、または純粹であること(being pure)」を挙げる(Goldman [2009]:125f, cf. Goldman [1993]:32)。ここから窺い知れる知覚的特性と美的特性に関する彼の理解を色彩を例に再構成して示すならば、対象のもつ色彩、たとえばその「赤さ」が知覚的特性であるのに対し、その「赤さ」のもつ「あざやかさ」が美的特性ということになる。われわれはこうしたゴールドマンの理解を踏まえながらも、「赤さ」を知覚的クオリアとして、また「あざやかさ」を美的クオリアとして捉え返すことで、「赤さ」と「あざやかさ」を各クオリアの範例と位置づける次第である。
- 「意識している(conscious)」と「覚知している(aware)」とを等置していることから明らかなように、ライカンの理解では「意識していること(being conscious)」と「覚知していること(being aware)」とはほぼ同じ内容をもつものと見なされる。
- ライカンが「無意識的(unconscious)」と「潜在意識的(subconscious)」とを等置している点は注目に値する。すなわちライカンにとって「無意識(unconsciousness)」と「潜在意識

(subconsciousness)」とはほぼ同義の術語としてあると見なされるのである。

- 盲視(blindsight)とは、広義では(とりわけ霊長類において)、一次視覚皮質(primary visual [striate] cortex)が欠如しているにもかかわらず、視覚が残存している状態を指す。一方狭義では、視覚皮質に損傷を受けた人が視覚的弁別をおこなえるにもかかわらず、その弁別している刺激が「見えている」とは意識していない状態を指す(cf. アイゼンク[1998]: 435-7)。あらためて言うまでもなく、長距離トラックドライバーのケースで問題となるのは、後者の狭義での盲視ということになる。
- Brent, Kennard and Ruddock [1994]では、「強制選択」実験(forced choice experiments)をとおして、左後頭皮質の外傷性障害によって右視野を欠損した患者が、その見えない右視野に提示された色刺激を高い頻度で(意識的知覚なしに)言語的に同定可能であることが確認された、との報告がなされている。
- 有線領外経路とは網膜→(中脳に位置する)上丘→視床枕→視覚連合野という経路であり、正常視の経路である有線領経路、すなわち網膜→外側膝状体→第一次視覚野(有線領皮質)という経路とは大きく異なる(大山、今井、和気編 [1994]: 212f, 本田 [1998]: 23-4)。
- 復帰抑制とは、手がかりが提示された後に、その位置や近隣の位置に提示された刺激に対する反応が遅れる現象を指す(大山、今井、和気、菊池編 [2007]: 62)。
- 意識の高階知覚理論によれば、高階知覚は「非概念的・アナログ的(non-conceptual and analog)」であり、別言するならば、高階知覚は一階の知覚に関する「きめの細かい(fine-grained)」表象としてあるということになるが(Carruthers [2011]: 12)、この点はとくに銘記しておくに値する。
- カルーザースによれば、高階知覚理論の名称としては「内的感覚理論(inner-sense theory)」よりも「高階感覚理論(higher-order-sense theory)」の方が相応しいということになる。というのも「内的感覚」には「痛みの感覚」や「内的触知覚(internal touchperception)」などが含まれるからである。(Carruthers [2011]: 12)。
- 本論で取り上げる二つのもの以外に、意識の高階知覚理論に対する他の主たる批判としては以下のものがある。
 - 「一般性の問題」(いわゆる「石批判」)(Van Gulick [2014]: 53, Carruthers [2011]: 40-1)
 - 誤表象の問題(Armstrong [1997]: 724, cf. Carruthers [2011]: 16, 37)
 - 脳内の物理的出来事を検出する物理的装置である内的感覚(内的モニタリングシステム)は知覚システムと同様の複雑な機構を必要とするが、そうした機構を具えた内的感覚(内的モニタリングシステム)が存在するとは考えにくい(Carruthers [2011]: 16-7)。なお高階知覚理論に対するこれ以外の批判については、Lycan [1997]を参照されたい。
- 「中枢状態唯物論」とは、心的状態を(われわれ人間も含む)心をもつ生物の脳あるいは中枢神経系の物理的状態と同一のものと見なす立場であると言える(Armstrong [1968]: 10)。

17. カルーザースはCarruthers [2000]において、一階の知覚に対応する高階知覚を生み出すには一階の知覚と同様のきわめて複雑で膨大な情報処理が必要となり、高階知覚(内的感覚)を可能とする脳内機構がさまざまな知覚系からの出力にあたる脳における物理的事象を感知する物理的装置であるとするならば、それは一階の知覚を可能とする知覚系と同程度に複雑で精巧な機構でなければならないと論ずるのであるが(Carruthers [2000]: 213, see also Carruthers [2011]: 16-7)、仮に高階知覚(内的感覚)を可能とする脳内機構が存在するとしたならば、当然ながらそれはカルーザースの挙げるこうした条件を何らかの仕方ですすめるものでなければならないことになる。因みに、カルーザースの上記の批判と内容的に密接に関係する批判が現実主義的高階思考理論に対しても寄せられているのであるが、この批判に対するローゼンタールの応答についてはRosenthal [2005]: 110, n.10を参照されたい。
18. ローゼンタールの言う「感覚質(sensory quality)」は本稿に言うクオリア(qualia)と基本的に同義のものと見なされる。
19. 因みに、知覚の具える感覚質と知覚の対象のもつ特性とを別個のものと捉える、ここに示されたローゼンタールの理解によれば、いわゆる「知覚の透明性(transparency of perception)」の概念は斥けられることとなる。
20. ここに明言しているように、ライカンは一階の知覚の具える感覚質とそれが表象する物理的対象のもつ特性とを等置するのであるが、このことから彼がローゼンタールとは異なり「知覚の透明性」の概念を受け入れていることが明らかとなる。
21. 「物理的赤」とは、赤の現象的(クオリア)経験によって対象に帰属される、物体表面のもつある特定の分光反射特性のような内在的物理的特性を意味するものとしてチャーマーズが考案した術語である。Chalmers [2010b]:390, see also Chalmers [2010a]:358, cf. Lycan [1996]: 72-5.
22. ライカンからの一節にある「物理的対象が環境との関係において(ecologically)もつような重要な特徴」が「広い特性(wide property)」にあたるものと考えられる。「広い特性」とは、本文以下に挙げる「狭い特性(narrow property)」との対比において捉えられた特性のあり方を指すが、「狭い特性」が環境にかかわらず物理的に同一の主体が必然的にもつ特性であるのに対し、「広い特性」は異なる環境のもとでは物理的に同一の主体であったとしてもそれをもたないことが可能な特性であると言える。なお「広い特性」および「狭い特性」について詳しくはChalmers [2010a]: 353-4およびPutnam [1975]を参照されたい。
23. ライカンからの一節にある「一階の状態に関する内的表象(internal representation of first-order states)」がここに言う高階知覚にあたる。
24. 「奇妙なクオリア(strange qualia)」と題されたLycan [1996]の第6章(Lycan [1996]: 109-41)においてライカンは、Lycan [1996]: 29に言う「アスペクト」や「方式」にあたるものを「あらたなる奇妙なクオリア(new strange qualia)」と名づけるのであるが、それについてライカンは「あらたなる奇妙なクオリアは、厳密な意味でのクオリアではなく、高階の特性(higher-order properties)である」(Lycan [1996]: 123)と述べている。
25. ライカンは(ある意味開き直って)「[ライカンの提唱する高階知覚理論という]この見解は、クオリアや現象的性格を説明する任は負わない」(Lycan [1996]: 28)とさえ主張する。
26. 念のため一言贅言を弄するならば、①の命題を受け入れるということは当然ながら、ディレンマを構成する第一の角をなす「高階知覚の具える感覚質はそれが知覚対象とする一階の知覚の具える感覚質と同一のものである」という命題を斥けることを意味する。
27. 「潜在的クオリア」については本稿第2章(8頁)を参照されたい。
28. ただし、ローゼンタールも明言しているとおり(Rosenthal [2002]: 409)、感覚質₁は知覚対象それ自体のもつ特性とは異なる。たとえば、われわれがトマトを知覚する際に、その知覚にともなう「赤さ」という感覚質₁は、トマトのもつ「赤さ」という特性とは異なる別個の性質であると見なされる。
29. この潜在的クオリアとしての感覚質₂に、その感受を作用内実とする三階の知覚がともなうとき、感覚質₂は意識化され、それによって本来の意味での感覚質、すなわち顕在的クオリアとして現勢化することになる。
30. この潜在的クオリアとしての感覚質₂に、その感受を作用内実とする三階の知覚がともなうことによって感覚質₂は意識化され、顕在的クオリアとして現勢化することになるのであるが、そのときこの顕在的クオリアとしての感覚質₂は、経験主体としての自己と一階の知覚にともなう感覚質₁との間に成立するある特定の関係様態を顕在的かつ現象的な仕方でも表わすことになる。
31. 意識の高階思考理論に対してはいくつかの批判が寄せられているが、それらについてはCarruthers [2011]: 20-25, 35-46およびGennaro [2017]: 98-104を参照されたい。
32. デネットもまたDennett [1978]およびDennett [1991]において傾性主義的高階思考理論に類した議論を展開しているが、そこでは(現象的意識を含む)状態意識と言語との間に認められるある種の構成的連関に重点が置かれることで、心的状態が高階の言語記述(higher-order linguistic description)に利用可能であることによって状態意識が説明されており、まさにその点で、カルーザースの提唱する傾性主義的高階思考理論との相違が認められる(see Carruthers [2000]: 278-88)。因みにカルーザースはこのデネットによる理論をその基本性格を明示する仕方でも「高階記述理論(higher-order description theory)」と呼んでいる(Carruthers [2000]: 280)。
33. 「心の理論(theory of mind)」とは、他者に心的状態を帰属する方式や他者の行為を説明したり予測したりするために心的状態を使用する方法を探求する認知科学(cognitive science)の一分野である。なお「心の理論」について詳しくはMarraffa [2019]を参照されたい。
34. See Carruthers [2000]: 153.
35. 消費者意味論を提唱する代表的論者にミリカン(Millikan [1984], Millikan [2000], Millikan [2004])とパピノー(Papineau [1987], Papineau [1993])がいるが、ミリカンおよびパピノーの理論の概要についてはそれぞれNeander [2018]: 24-31, 31-5を参照されたい。
36. 傾性主義的高階思考理論に対してはいくつかの批判が寄せ

- られているが、それらについてはCarruthers [2011]: 29-30, 35-46およびGennaro [2017]: 104-5を参照されたい。
37. アームストロングはArmstrong [1997]において「[「反射的」内観的覚知(“reflex” introspective awareness)」と比較において「本来的内観(introspection proper)」について言及している。アームストロングによれば、「反射的」内観的覚知がもつばら心的状態と心的活動に関する内観的覚知にのみ関わるものであるのに対し、本来的内観は加えてその内観的覚知に関する二階の内観的覚知にも関わるのであるが、両者に関する彼の説明から判断するならば(Armstrong [1997]: 725)、「反射的」内観的覚知と本来的内観はそれぞれわれわれの言う「潜在的な内観(potential introspection)」と「顕在的内観(actual introspection)」におおよそ対応するものであることが明らかとなる。
38. 高階思考理論においては概念的思考としての命題がその(顕在的)内観の内容をなすのに対し、高階知覚理論においては「非概念的・アナログ的」な直観がその(顕在的)内観の内容をなすのであるが、前者が言語化可能であるのに対し、後者は(少なくとも直接的には)言語化不可能であるという点はとくに銘記しておく必要がある。
39. 「自己を表象するとき同時に表象する自己を意識する」という自己意識に関する理解は、クリーゲルの提唱する「意識の自己表象理論(self-representational theory of consciousness)」に通ずるものと見なされる。cf. Kriegel [2006], Kriegel [2009], Smith [2017]: 42.
40. Merleau-Ponty [2003]: 170-201, 311-2.
41. クオリアは本来意識的なものと考えられるのであるが、本稿第2章においてライカの議論(Lycan [1996]: 76-7)を批判的に検討するなかでその定義的理解を示したように、いまだ意識されていない無意識的なクオリアを指して「潜在的クオリア」と呼び、それを[Q]と角括弧付きで表記することにする。
42. 一般に感受は広義での知覚の一種としてその下に包摂される作用であるため、潜在的知覚的クオリア [pQ]をターゲットとし、その感受を作用内実とする二階の表象は、高階思考ではなく高階知覚であると考えられる。
43. こうした理解は、高階思考HOTを引き起こす傾性をその理論構制のうちに取り入れているという点で、本稿第3章第2節第2項で取り上げた、カルーザの唱導する傾性主義の高階思考理論との共通性を有するが、傾性主義の高階思考理論においては高階思考HOTを引き起こす傾性をもつのは一階の知覚FOPであるとされるのに対し、ここでは傾性をもつのはあくまで二階の知覚HOP₁(M₂)であるとされる点で、両者は根本的に異なった理論構制にもとづくものであると言える。
44. 傾性概念一般に関して詳しくはChoi and Fara [2014]を参照のこと。
45. 高階思考HOTの連鎖が実際には三階の思考HOT₂(M₃)から四階の思考HOT₃(M₄)あたりが限界であるということは、各階における内観の内実を確認してみるならば容易に首肯されよう(ここでは「赤さ」の知覚に即して各階における内観の内実を示すことにする)。
- ①二階の思考HOT₁(M₂):「私は赤を感覚している」
- ②三階の思考HOT₂(M₃):「私は赤を感覚している」ことを内観している」
- ③四階の思考HOT₃(M₄):「私は赤を感覚している」ことを内観している」ことを内観している」
46. 本稿第3章第4節で論じたように、一階下に位置するn-1階のHOT_{n-1}(M_n)を表象する自己意識SC₁自体は高階思考HOT_nではなく高階知覚HOP_nとしてある。
47. 「潜在的知覚的クオリア[pQ]に対する二階の知覚HOP₁(M₂)もまた(それとは別個の)クオリアをとまなう」というここに示したわれわれの理解は、本稿第3章第1節第2項[2]で取り上げた「一階の知覚が具える感覚質(クオリア)とは別に、高階知覚が具える感覚質(クオリア)は存在しない」というローゼンタールの主張(Rosenthal [2002]: 409)と真っ向から対立することになる。なお、このローゼンタールの主張に対するわれわれの立場からの応答については、本稿第3章第1節第2項[2]の当該箇所(16-7頁)を参照されたい。
48. 「外的連想(extrinsic association)」は「内的連想(intrinsic association)」との対比において捉えられた連想のあり方である。すなわち、「内的連想」がある表象をそれに内在するコンテキストのもとに他の表象と結び付けるものであるのに対し、「外的連想」はある表象を何らかの外的なコンテキストのもとに他の表象に結び付けるものと言える。因みに、「内的連想」が生物学的もしくは進化心理学的な基盤に根差すものであるのに対し、「外的連想」は個人的もしくは文化的な基盤に根差すものと見なされる。
49. 潜在的美的クオリア[aQ]は、二階の知覚HOP₁(M₂)が一切の目的連関や外的連想関係を離れ、潜在的知覚的クオリア[pQ]それ自体に向けられることによって生起するものであるため、二階の知覚HOP₁(M₂)をとまなうことによって顕在化(意識化)する顕在的知覚的クオリアpQと潜在的美的クオリア[aQ]との関係は、後者が潜在的美的クオリア[aQ]でない場合に比べ、より安定したものとなる。
50. See 松崎 [2013]: 118.
51. 知覚的クオリアと各階層における美的クオリアとの関係を具体例をもとに図式化して示すならば以下ようになる。
- pQ: 「赤」のクオリア
aQ₁: 「あざやかさ」のクオリア
aQ₂: 「痛切さ」のクオリア
aQ₃: 「悲しみ」のクオリア
- pQ ($\boxed{aQ_1} \leftarrow aQ_2 \leftarrow aQ_3$): 「悲しくなるほどの(悲しいまでに)痛切なあざやかさをもった赤」= ($\boxed{\text{「あざやかさ」}} \leftarrow \text{「痛切さ」} \leftarrow \text{「悲しみ」}$) をもった赤
- 因みに、上の図式において四角囲いた項は、二階以上の美的クオリアがそのもとに統合される一階の美的クオリアにあたる。
52. 当然のことながら、ここに挙げたHOT系列にもとづく内観とは別に、HOP系列にもとづく内観((aHOP₁[M₂] ← aQ₁ ← $\boxed{\text{HOP}_2(\text{M}_3)} \leftarrow \text{HOP}_3(\text{M}_4)$ [四角囲いた項は内観の内実にあたる])も存在するが、HOT系列にもとづく内観が「顕在的な強い内観」であるのに対し、HOP系列にもとづく内観は「顕在的な弱い内観」にとどまることになる。

53. aQ_2, aQ_3, aQ_4, \dots に関しても、それぞれ同様のHOTの連鎖過程が成立しうる。たとえば、 aQ_2 に関して言うならば、 $(aHOP_2[M_3] \rightarrow aQ_2 \leftarrow HOT_1(M_4) \leftarrow HOT_2(M_5) \leftarrow \dots)$ というHOTの連鎖過程が成立しうるが、これらの過程もまた最終的に HOP_{2+m} としての自己意識SC \cup によって終結を見ることになる。このHOTの連鎖過程を一般化した形で定式化したものが以下の【M19】である。

【M19】 $(aHOP_n[M_{n+1}] \rightarrow aQ_n \leftarrow HOT_1(M_{n+2}) \leftarrow HOT_2(M_{n+3}) \leftarrow \dots SC(HOP_{n+m}) \cup$

54. ここに示した知覚的クオリア pQ と潜在的美的クオリア aQ との間の関係は以下の論証をとおして確証される(なお以下の記号表記に見られる「 \square 」は形而上学的必然性を表わす文操作子を、「 E 」は存在を表わす一項述語を、「 \rightarrow 」は実質含意〔material implication〕を表わす二項の文操作子を、それぞれ意味する。see Correia [2008]: 2- 3)。

① $\square (E aHOP_1 \rightarrow E pQ)$: 前提1

② $\square (E aHOP_1 \rightarrow E [aQ_1]) \wedge \square (E [aQ_1] \rightarrow E aHOP_1)$: 前提2

②から縮小律により

③ $\square (E [aQ_1] \rightarrow E aHOP_1)$

③と①から

④ $\square (E [aQ_1] \rightarrow E aHOP_1) \wedge \square (E aHOP_1 \rightarrow E pQ)$

④から推移律により

⑤ $\square (E [aQ_1] \rightarrow E pQ)$

⑤の対偶

⑥ $\square (\neg E pQ \rightarrow \neg E [aQ_1])$

55. Cf. 松崎 [2019]: 11.

56. See Carruthers [2011]: 30-5.

57. クリーゲルが意識の自己表象理論を「等階(同一階層)モニタリング理論(same-order monitoring theory)」(Kriegel [2006]: 143)と呼んでいることから明らかなように、クリーゲル自身は意識の自己表象理論を高階表象理論とは別個の等階(同一階層)表象理論と理解している。しかしながらカルーザースによれば、クリーゲルのこうした理解は必ずしも妥当なものとは言えず、意識の自己表象理論はあくまで高階表象理論の一種として捉えられることになる(Carruthers [2011]: 31)。

参考文献

Armstrong, David. [1968]. *A Materialist Theory of Mind*. London: Routledge and Kegan Paul(抄訳 D. M. アームストロング『心の唯物論』鈴木登訳、勁草書房、1996年)。
 ———. [1997]. “What is Consciousness?” In: Block, Flanagan and Güzeldere (ed.) [1997]: 721-8.
 Armstrong, David and Malcolm, Norman. [1984]. *Consciousness and Causality*. Oxford: Basil Blackwell(D. M. アームストロング、N. マルコム『意識と因果性—心の本性をめぐる論争』黒崎宏訳、産業図書、1986年)。
 Block, Ned. [1995]. “How Many Concepts of Consciousness?” *Behavioral and Brain Sciences* 18 (2):

272-87.

Block, Ned, Flanagan, Owen and Güzeldere, Güven (ed.). [1997]. *The Nature of Consciousness: Philosophical Debates*. Cambridge, MA: The MIT Press.

Brent, P.J., Kennard, C. and Ruddock, K.H. [1994]. “Residual Colour Vision in a Human Hemianope: Spectral Responses and Colour Discrimination.” *Proceedings of the Royal Society of London: Biological Sciences* 256 (1347): 219-25.

Brook, Andrew. [2013]. “Kant’s View of the Mind and Consciousness of Self.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2013 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2013/entries/kant-mind/>>.

Carruthers, Peter. [2000]. *Phenomenal Consciousness: A Naturalistic Theory*. Cambridge: Cambridge University Press .

———. [2004]. “HOP over FOR, HOT Theory.” In: Gennaro (ed.) [2004]: 115-35.

———. [2005]. *Consciousness: Essays from a Higher-Order Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

———. [2011]. “Higher-Order Theories of Consciousness.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2011 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/fall2011/entries/consciousness-higher/>>.

Chalmers, David J. [1996]. *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*. Oxford: Oxford University Press (デイヴィッド・J・チャーマーズ『意識する心』林一訳、白揚社、2001年)。

——— (ed.). [2002]. *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Readings*. Oxford: Oxford University Press.

———. [2010]. *The Character of Consciousness*. Oxford: Oxford University Press(デイヴィッド・J. チャーマーズ『意識の諸相』(上・下)太田絃史他訳、春秋社、2016年)。

———. [2010a]. “The Representational Character of Experience.” In: Chalmers [2010]: 339-79.

———. [2010b]. “Perception and the Fall from Eden.” In: Chalmers [2010]: 381-454.

Choi, Sungho and Fara, Michael. [2014]. “Dispositions.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/dispositions/>>.

Correia, Fabrice. [2008]. “Ontological Dependence.” *Philosophy Compass* 3(5): 1013-32.

Dennett, Daniel C. [1978]. “Toward a Cognitive Theory of Consciousness.” *Perception and Cognition: Issues in the Foundations of Psychology*. 9: 201-28.

———. [1991]. *Consciousness Explained*. New York / Boston / London: Little Brown and Company(デネット『解明される意識』山口泰司訳、青土社、1998年)。

- Gennaro, Rocco J. (ed.). [2004]. *Higher-Order Theories of Consciousness*. Amsterdam: John Benjamins.
- . [2012]. *The Consciousness Paradox: Consciousness, Concepts, and Higher-Order Thoughts*. Cambridge, MA: MIT Press.
- . [2017]. *Consciousness*. London: Routledge.
- Goldman, Alan H. [1993]. “Realism About Aesthetic Properties.” *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 51: 31-7.
- . [2009]. “Aesthetic Properties.” In: *A Companion to Aesthetic*. 2nd edn. Edited by Stephen Davies et al. Oxford: Wiley-Blackwell: 124-8.
- Kant, Immanuel. [1976]. *Kritikder reinen Vernunft*. Nach der ersten und zweiten Original-Ausgabe neu herausgegeben von Raymund Schmidt. Hamburg: Felix Meiner.
- Kriegel, Uriah. [2006]. “The Same-Order Monitoring Theory.” In: Kriegel and Williford (ed.) [2006]: 143-70.
- . [2009]. *Subjective Conscienceness: A Self-Representational Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Kriegel, Uriah and Williford, Kenneth (ed.). [2006]. *Self-Representational Approaches to Consciousness*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Lau, Hakwan and Rosenthal, David. [2011]. “Empirical Support for Higher-Order Theories of Conscious Awareness.” *Trends in Cognitive Sciences* 15: 365-73.
- LeDoux, Joseph E. and Brown, Richard. [2017]. “A Higher-Order Theory of Emotional Consciousness”. *Proceedings of the National Academy of Science of the United States of America*. URL=<<https://www.pnas.org/content/114/10/E2016>>.
- Lycan, Wiliam. [1987]. *Consciousness*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- . [1996]. *Consciousness and Experience*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- . [1997]. “Consciousness as Internal Monitoring” In: Block, Flanagan and Güzeldere (ed.) [1997]: 755-71.
- Marruffa, Massimo. [2019]. “Theory of Mind”. Fieser, James and Dowden, Bradley (general editors). *Internet Encyclopedia of Philosophy*. URL=<<https://www.iep.utm.edu/theomind/>>. accessed April 7, 2019.
- Merleau-Ponty, Maurice. [2003]. *Le visble et l'invisible*. First published in 1964. Paris: Gallimard(モーリス・メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1989年).
- Millikan, Ruth G. [1984]. *Language, Thought and Other Biological Categories*. Cambridge, MA: MIT Press.
- . [2000]. *On Clear and Confused Ideas: An Essay about Substance Concepts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . [2004]. *Varieties of Meaning*. Cambridge, Mass: MIT Press(ルース・G・ミリカン『意味と目的の世界—生物学の哲学から』信原幸弘訳、勁草書房、2007年).
- Neander, Karen. [2018]. “Teleological Theories of Mental Content”. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2018 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/spr2018/entries/content-teleological/>>.
- Papineau, David. [1987]. *Reality and Representation*. Oxford: Basil Blackwell.
- . [1993]. *Philosophical Naturalism*. Oxford: Blackwell.
- Putnam, Hillary. [1975]. “The meaning of ‘meaning,’”. *Minnesota Studies in the Philosophy of Science* 7:131-193.
- Rosenthal, David M. [1997]. “A Theory of Consciousness.” In: Block, Flanagan and Güzeldere (ed.) [1997]: 729-53.
- . [2002]. “Explaining Consciousness.” In: Chalmers (ed.) [2002]: 406-21.
- . [2005]. *Consciousness and Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Schwitzgebel, Eric. [2014]. “Introspection.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Summer 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/sum2014/entries/introspection/>>.
- Smith, Joel. [2017]. “Self-Consciousness”. *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2017 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2017/entries/self-consciousness/>>.
- Van Gulick, Robert. [2000]. “Inward and Upward: Reflection, Introspection, and Self-Awareness.” *Philosophical Topics* 28(2): 275-305.
- . [2004]. “Higher-Order Global States (HOGS): An Alternative Higher-Order Model of Consciousness.” In: Gennaro(ed.) [2004]: 67-92.
- . [2014]. “Consciousness.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring 2014 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<http://plato.stanford.edu/archives/spr2014/entries/consciousness/>>.
- アイゼンク、M. W. 編. [1998].『認知心理学事典』野島久雄、重野純、半田智久訳(原著1990年)、新曜社。
- 大山正、今井省吾、和気典二編. [1994].『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック』誠信書房。
- 大山、今井、和気、菊池編. [2007].『新編 感覚・知覚心理学ハンドブック Part2』誠信書房。
- 橋本照男、入來篤史. [2012].「体性感覚」、林康紀編『脳科学辞典』。URL = <https://bsd.neuroinf.jp/w/index.php?title=%E4%BD%93%E6%80%A7%E6%84%9F%E8%A6%9A&mobileaction=toggle_view_mobile>.
- 本田仁視. [1998].『視覚の謎－症例が明かす(見るしくみ)』福村出版。
- 松崎俊之. [2013].「知覚的特性と美的特性との関係に関する一

考察』、『石巻専修大学 研究紀要』第24号、105-25頁。

——. [2019].「表象的特性としての知覚的クオリアと美的クオリア
—フレーゲ的表象主義にもとづく考察』、『東北芸術工科大学
紀要』第26号、1-18頁(URL = <[http://archives.tuad.ac.jp/
wp-content/uploads/2019/02/tuad-bulletin26-2-
matsuzaki.pdf](http://archives.tuad.ac.jp/wp-content/uploads/2019/02/tuad-bulletin26-2-matsuzaki.pdf)>).

本稿は、美学会東部会2019年度第2回例会における同一論題
による研究発表(2019年7月13日、於東北大学)にもとづく。